公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム

「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2013年度　活動報告書

近江楽座＝学生らしさを活かして地域に学び、育ち、貢献できる場　をめざしています

はじめに

仕事と生業（なりわい）

現在、日本には800校近い大学、短大、高専に300万人近い学生が在学している。学生たちの多くは親元を離れ、生まれて初めて訪れる地域で新しい暮らしを始める。そのこと自体、まさに地域活動のようなものなのだ。

よく知らない場所を訪れて、訳もわからないまま暮らし始めることで、自分たちが育った地域の魅力に気づき、その大切さや、守るべきものを学ぶことができる。人には帰る場所が必要だ。地元で、住みたい、暮らしたい、働きたい。地域とは帰るための場所だ。その気持ちを投影して訪れた地域で気になる生活を送っている人や場所に出会う。「気になる」。そんな興味がモチベーションとなって人との関わりが生まれる。何の変化もない日々を送る地域によそ者として訪れることには勇気がいる。しかし、学生の分際だから、躊躇しないで地面に近い活動をあっさりはじめてしまう。そうやって、学生たちの近江楽座は10 年続いてきた。10年目がゴールではない。小さな節目だ。昨年から活動を始めた学生たちにとっては、まだ1 年目だ。

しかし、10年間のバトンリレーが築いた地域での信頼と実績は彼らを後押ししてくれる。大学側も学生同様、その間2度交代した3名の学長や多くの教員がバトンリレーをして支援してくれた。仲間も生まれた。高知県立大学の「立志社中」など、地域に根ざした大学、学生が全国に増えている。

最近よく耳にする生業（なりわい）という言葉があるが、学生の地域活動は生業とは言わない。例えば、農家の方々自分たちが収穫した作物を販売し生計をたてることは生業だ。その恵みをつくり出すために畑を耕し、育て、収穫することは仕事と呼ぶ。学生たちの活動は、実は仕事なのだ。自分たちの生業を目的としていない、だからこそ地域に必要なのだ。真摯に地域の課題を憂え、魅力を発信する力が若者にはある。やってみると、意外にも、もっと魅せることができると実感する。また、活動で得たことを生業とするものが多く巣立っていった。後輩たちに多くの仕事を残して。多くの仕事をし、多くの生業を生む。近い将来、遠い未来にむけて地域を耕す（たがえす）仕事をしてきた。英語の'culture' は土地を耕すという意味に由来している。こんな当たり前のことに気づくための10 年だったのかもしれない。学生時代に多くの仕事をし、卒業後の自分たちの社会の生業を生みだして行く。地域に生業があふれる時代がくる。近江楽座が歩んだ10 年間の学生たちと地域のひとたちの汗や想いに触れ、学生たちが地域に入って活動する姿が当たり前の社会になりはじめている。今まさに大きな潮目の変化の兆しを感じる。生業を必要とする300万人の予備軍が待っている。

平成 27 年 1 月
近江楽座専門委員会委員長
印南比呂志

目次

はじめに 1

1 近江楽座について 5

1-1 近江楽座とは 6
1-2 プロジェクト区分 7
1-3 プロジェクトの採択について 8

2 各プロジェクトからの活動報告 11

2-1 活動実績報告 11
2-2 『らくざしんぶん』 52

3 共通プログラムの報告 59

3-1 中間報告会「伝えよう！活動のあしあと展」 60
3-2 近江楽士 (地域学) 副専攻 63
3-3 活動報告会 65

4 学生有志活動 69

4-1 近江楽座 合同説明会 70
4-2 近江楽座 10 周年記念イベント 72

5 他大学・団体との交流 79

5-1 韓国大学生訪日研修団視察 80
5-2 高知県立大学「立志社中」中間報告会 81
5-3 環びわ湖大学地域交流フェスタ 2013 82

6 情報発信 85

6-1 ホームページ、リーフレット、プロジェクトレポート 86
6-2 京都新聞 夕刊特集「@キャンパス」 88
6-3 『びわ湖 No.79』一般社団法人滋賀県建築士事務所協会 創立 30 周年記念特集号 90

7 付録 91

7-1 プログラム推進メンバー 92
7-2 メディア掲載一覧 93

1 近江楽座について

1-1 近江楽座とは

滋賀県立大学の“スチューデントファーム「近江楽座」–まち・むら・くらしふれあい工舎–”は、地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する。」を目的とする学生主体のプロジェクトを募集、選定し、全学的に支援する教育プログラムです。

平成16年度に文部科学省「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)」に採択され、平成18年度までの3年間の活動実績が大学発地域貢献の先進的な取り組みとして学内外で高く評価されました。そして、翌平成19年度からは大学独自の予算を用いてプログラムを継続し、平成25年度までの10年間で延べ227のプロジェクトが活動してきました。これまでに培ってきたノウハウや地域との繋がりを活かし、多彩な活動を展開しています。

教育効果を高め、大学と地域の連携を深めるための3つの目標

- 地域の課題に大学・学生が取り組み、地域の活性化に向けて共に活動する。
- 学生が地域の方々と一緒に活動することにより、学内だけでは学べないことを体験する。
- 大学と地域が共同して、よりよい地域づくり・人づくりにつながるしくみをつくる。

3つのサポートシステム

近江楽座専門委員会・学生委員会・近江楽座事務局（地域共生センター）の連携の下、3つのサポートシステムにより、全学的に活動を推進しています。

■ 活動助成システム

“スチューデントファーム「近江楽座」”として選定されたプロジェクトの事業計画に基づき、活動に必要な事業費を審査し、助成します。

■ コンサルティングシステム

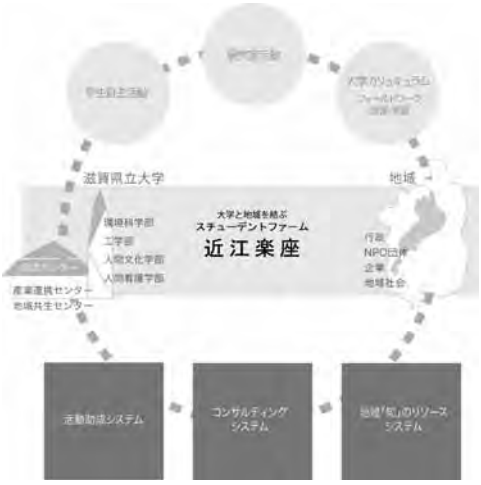
教員の指導・助言に加え、行政や専門家の紹介など、学生がプロジェクトを進めていくために必要なコンサルティングを行います。

■ 地域「知」のリソースシステム

大学と地域連携に係わる情報を他大学、研究機関、行政、NPO団体などと共有化・活用するためのデータベースを構築し、活動をサポートします。

＜3つのサポートシステム＞

＜サポートシステム概念図＞



1-2 プロジェクト区分

平成19 年度より、「地域活性化への貢献」をテーマに学生主体の地域活動を行う「A プロジェクト」に加え、新たに、自治体や企業等から提示された課題について、学生主体のプロジェクトチームを結成し活動する「B プロジェクト」がスタートしました。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動を募集します。

昨年度までの継続活動を対象とした①「継続プロジェクト」、新規活動を対象とした②「新規プロジェクト」、さらに平成 23 年度から新たに③「S プロジェクト」として、これまでの実績をもとにステップアップを目指すプロジェクトで活動資金の助成を必要としないプロジェクト、の３つの区分で募集し、支援するプロジェクトを選定しています。

B プロジェクト

自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」として取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトを募集します。学生チームにはテーマに対する企画提案を求め、採択されたチームは、指導教員と地域共生センターがフォローし、依頼先と共同で取り組みます。

A プロジェクト

「地域活性化への貢献」をテーマとする学生主体の地域活動プロジェクト。

- 継続プロジェクト
  - Sプロジェクト（平成23年度より開始）
    活動資金の助成を必要とせず、これまでの実績をもとにステップアップを目指す取組み
- 新規プロジェクト

B プロジェクト

学生主体のチームが自治体や企業等から提示された課題に、プロポーザル方式で企画提案を行い、選定されたチームと依頼先とが共同で取り組むプロジェクト（平成19年度より開始）

1-3 プロジェクトの採択について

プロジェクト募集期間

A プロジェクト
日　時：4 月 10 日（水）～ 5 月 7 日（火）

募集説明会

A プロジェクト
日　時：4 月 15 日 (月) 12:30~13:00
会　場：講義室 A4-107

応募件数

A プロジェクト
20 チーム うち継続プロジェクト 17 件
(S プロジェクト1件含む)、新規プロジェクト 3 件

プロジェクト審査

A プロジェクト「公開プレゼンテーション・審査会」
日　時：5 月 19 日 (日) 9:30-16:00
会　場：講義室 A3-301
内　容：プレゼンテーション（プレゼンテーション
　　シートによるプロジェクト説明
　　1 チームあたり発表 4 分、質疑応答 3 分）
　　および質疑応答、審査（非公開）

選定委員（順不同　敬称略）：

○滋賀県立大学理事・副学長	菊池潮美
○滋賀県立大学工学部教授	柳澤淳一
○滋賀県広報課主幹	武田朋子
○ ㈱バード・デザインハウス	竹岡寛文
○淡海ネットワークセンター	膽吹憲吾

採択および採択通知

A プロジェクト
日　時：5 月 23 日（木）
通知方法：近江楽座ホームページ
　　および学生ホールの掲示板にて通知

採択件数

A プロジェクト
20 チーム うち継続プロジェクト 17 件
(S プロジェクト1件含む)、新規プロジェクト 3 件

活動説明会

A プロジェクト
日　時：5 月 30 日 (木) 12:30~13:00
会　場：講義室 A4-107
内　容:活動全般にあたっての注意事項、事業計画、
　　会計処理等の進め方に関する説明会

＜公開プレゼンテーションの様子＞

応募チームメンバー・学内学生・教員・卒業生・関係団体の方など、合計約 100 名の方がお越しくださいました。

事前に審査員の先生方にそれぞれの応募チームの事業計画書と予算計画書に目を通してもらい、公開プレゼンにて各チームの発表・質疑応答をふまえて、採点、審査を行いました。

時間	発表順	区分	プロジェクト名
9:30～9:35	はじめの挨拶		
9:35～9:42	1	継続	内湖における侵略的外来種駆除
9:42～9:49	2	継続	ART FORUM 2013 DIG`S
9:49～9:56	3	継続	勇鬼楽座
9:56～10:03	4	継続	信・乗・人―shigaraki field gallery project―
10:03～10:10	5	継続	かみおかべ古民家活用計画―SLEEPING BEAUTY―
10:10～10:17	6	継続	とよさらだプロジェクト
10:17～10:24	7	新規	S(Saigai＆Shiga)　T(Taisaku&Tanoura)交流推進プロジェクト
10:24～10:31			休憩
10:31～10:38	8	継続	地域博物館プロジェクト
10:38～10:45	9	継続	木岡プロジェクト
10:45～10:52	10	継続	Taga-Town-Project
10:52～10:59	11	継続	障がい児・者。自立支援共生社会プロジェクト
10:59～11:06	12	新規	三階蔵覚蔵プロジェクト
11:06～11:13	13	継続	たけとも―竹の会所 友の会―
11:13～11:20	14	継続	チーム・バンディラ・ジ・オウロ
11:20～11:27			休憩
11:27～11:34	15	継続	おとくらプロジェクト
11:34～11:41	16	継続	未来看護塾
11:41～11:48	17	新規	政所茶レン茶"―
11:48～11:55	18	継続	あかりんちゅ
11:55～12:02	19	継続	能登川商店街とのコラボレーション企画による地域活性化
12:02～12:09	20	継続	とよさと快蔵プロジェクト
12:09～12:15	終わりの挨拶		

13:00～15:00	審査会（別会場にて非公式で行います）

発表スケジュール

プレゼンシート（１枚）を用いて発表します
発表４分間という限られた時間の中でプロジェクトの魅力をアピール。どのチームも意気込みが伝わってきました

活動冊子や模型などの成果物をみせながら
発表するチームもありました

発表後、審査員また会場からの質疑応答が３分間あり、
審査員から申請書の内容も踏まえた鋭い質問を受けました

2 各プロジェクトからの活動報告

2-1 活動実績報告

01 内湖における侵略的外来種駆除 12

02 ART FORUM 2013 DIG'S. 14

03 男鬼楽座. 16

04 信・楽・人 -shigaraki field gallery project- 18

05 かみおかべ古民家活用計画 -SLEEPING BEAUTY- 20

06 とよさらだプロジェクト 22

07 S(Saigai & Shiga)T(Taisaku&Tanoura)交流推進プロジェクト 24

08 地域博物館プロジェクト 26

09 木興プロジェクト 28

10 Taga-Town-Project 30

11 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト 32

12 三階蔵覚醒プロジェクト 34

13 たけとも - 竹の会所 友の会 - 36

14 チーム・バンデイラ・ジ・オウロ 38

15 おとくらプロジェクト 40

16 未来看護塾. 42

17 政所茶レン茶゛ー 44

18 あかりんちゅ 46

19 能登川商店街とのコラボレーション企画による地域活性化. 48

20 とよさと快蔵プロジェクト 50

次ページ以降のチームデータについて補足説明

※近江楽座活動年度について
H ：不参加
H ：参加
を示しています

※メンバー数は、活動に関わった学生の総数です。

01 内湖における侵略的外来種駆除

守ろう！琵琶湖の生態系！

ブラックバスをはじめとした侵略的外来種は在来種を捕食・駆逐して、日本固有の水辺の生態系を壊しています。私達は、内湖という特別な環境において在来種にとって棲みやすい環境をつくり守っていきたいと考え、駆除や啓発などの活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： 滋賀県大 BASSER'S
代表者： 北野大輔（環境科学部）
メンバー数： 15 名
指導教員： 浦部美佐子、野間直彦（環境科学部）
活動場所： 彦根市神上沼、琵琶湖
関係団体： 全国ブラックバス防除市民ネットワーク
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT 実施事業

(1) お魚探検隊 in 不飲川～夏の陣～

(2) 犬上川川遊びコーディネート
★見出し写真：犬上川川遊び ネートの活動 (07/21)

(3) 神上沼定例駆除活動（投網による外来魚の駆除、大型産卵個体の駆除）

春季における大型産卵個体の駆除 (04/18)

(4) 生き物観察会

生き物観察会 @ 愛西土地改良区の様子 (06/16)

(5) 外来生物勉強会

(6) 外来魚解剖体験補助スタッフ

(7) 外来魚駆除釣り大会協力隊

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、創立メンバーの引退があり、ほぼ新メンバーで活動を開始することになった。メンバー構成は，環境科学部の学生だけでなく、地域文化学部の学生もいた。同じ学部内であってもそれぞれの専門知識の異なるメンバーが多く、外来生物駆除において様々な視点からの意見が出るようになった。

活動は神上沼での定期的な外来魚駆除活動を主とし、今年度で 3 年となった我々の活動を情報交換会にて発信することができた。

外来生物問題や駆除については当事者のみが知っていればよいものではなく、地域住民を含めた水辺環境に携わる人々に広く浸透すべきものである。そこで、啓発活動にも重点を置き、当初から予定していた自主開催のイベントや大学祭以外にも、地域で開催される行事や環境教育イベントに参加した。このような啓発イベントの開催、行事への参加により、我々が環境コーディネーターとして地域の人々に水辺に触れてもらう機会を提供することができ、子どもたちに自然の魅力や課題を知ってもらうことができた。

一方で、今年度は台風の影響により秋の定期イベントが開催できなかったこともあり、満足のいく内容とは言えない。来年度は、啓発イベントの内容をより充実させていきたい。

さらに、今年度は企業や NPO、行政などの外部団体との交流、協力事業もあり、我々だけではできない活動も体験することができた。このような外部とのつながりを大切にし、積極的に活動をしていきたい。その中で得た知識、経験を活用し、来年度はさらに高いレベルでの活動を目指す。積極的に地域に出向くと同時に新たな取り組みにも挑戦し、滋賀県大 BASSER'S の更なる発展を目標とする。

活動を通して学んだこと

この活動により普段では見えない問題を痛感できた。様々な水域で外来魚が生息していることは周知の事実である。しかし、その影響は数値などでしかみることはなく、深刻な問題として実感しにくいところがあった。そこで、この活動を通し現場をみたことで、問題意識を高め、知識を共有することができた。

佐竹祐亮（生物資源管理学科 3 回生）

この活動に参加した当初、外来魚問題についての知識があまりなかった。しかし、定期的な駆除活動や勉強会、外来魚情報交換会への参加を通して、外来魚が琵琶湖の生態系に与える影響、効率的な駆除方法などを学んだ。これらのことを学んで、改めて外来魚駆除を継続していくことの必要性を感じた。

佐飛雅史（生物資源管理学科 2 回生）

活動を始めたころは、外来魚は悪者でただ駆除すればいいと思っていました。しかし、毎月の定例会や勉強会を通して、もっと生態系全体を知って、それを守る手段として駆除活動を行なっていかなければならないと強く感じました。また、調査技術を身に着けることができ、非常にいい経験になりました。

芳本悠未（生物資源管理学科 3 回生）

BASSER'S の活動で感じたのは、市民の方々と外来魚駆除に関わっている方々とでは、外来魚問題についての捉え方や熱意、危機意識に大きな差があるということ。そこで、外来魚駆除だけでなく、このような問題を少しでも解消できるように、今後も活動を続ける必要があると感じました。

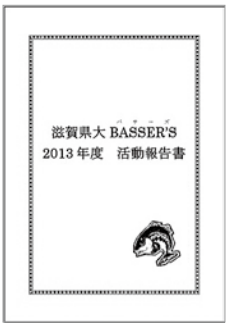
森井清仁（生物資源管理学科 1 回生）

地域の方のコメント　（抜粋）

薩摩町自治会長　山本清さん
（BASSER'S 自主開催イベントの広報面で協力頂いた方）

週末に、神上沼で網を投げている姿をよく目にします。数年前までは外来魚でいっぱいだった神上沼も、最近は在来魚が増えてきているようだと聞き、昔からこの場所をよく知っている者にとっては、嬉しい知らせです。普段の活動に我々が参加するというのはなかなか難しいですが、イベントの広報などで協力させてもらいました。また、イベント以外で普段の活動に興味を持っている人もいるようです。難しいとは思いますが、普段の駆除活動にも市民が少し参加できるようになれば、イベント以外でも地域住民との交流が図れるのではないでしょうか。学生という若い力は貴重ですので、これからも継続していってほしいと思います。

DELIVERABLE　成果物／制作物



2013 年度活動報告書
（カラー 28 ページ）

指導教員より

環境科学部 環境生態学科　浦部美佐子

本年度の活動は、他の楽座チームとの提携や全国ブラックバス防除市民ネットワークでの報告など、外部とのつながりをより強化できた年であったように思います。外来生物の駆除は地域の問題でもありますが、駆除方法や影響評価、法的規制の状況などは年々変化していくため良い活動を続けていくには最新情報に絶えず注意し、勉強を続ける必要があります。今後の地域活動と同時に、全国的な視点も失わず活動を続けてください。

近江八幡の魅力再発見！！

近江八幡の地域資源を題材にWSやイベントを行い、地元の方々に発信し、魅力を再発見してもらうことを目的にしています。これまでにヴォーリス建築、街歩き、八幡山の竹間伐などをテーマにしてきました。拠点の町家では毎週土曜日にカフェを営業しています。

TEAM DATA

チーム名： DIG'S
代表者： 山本鮎子（環境科学部）
メンバー数： 10名
指導教員： 井手慎司（環境科学部）
活動場所： 近江八幡市
関係団体： 八景会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 **H21** **H22** **H23** **H24**

PROJECT 実施事業

(1) 八幡掘まつり

八幡堀まつり・あんどんワークショップ (09/14)

(2) キッズ学芸員プロジェクト

(3) 西の湖ワークショップ
★見出し写真：西の湖探検ワークショップ (11/24)

(4) あじさい剪定ワークショップ

(5) NO-MA 共同イベント

(6) 世界湿地の日イベント

(7) 活動拠点整備

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度の DIG'S の活動の成果は、以前からのつながりを生かした共同ワークショップができたことと、最後までねばり強く活動できたことである。

まず1つ目に関して、昨年の活動拠点整備でお世話になった方々との共同ワークショップ、同じく共同イベントなど、他団体との関係がより深めることができたと思われる。これまで DIG'S として近江八幡で6年間活動を続けてきたが、地域の方と共同で何かを成し遂げることで、私たちの存在も浸透してきているのだなと実感することができた。 2つ目のねばり強く活動できたことについて。今年度はコアメンバーが一気に減ってしまい、自分たちでの活動の幅が狭まってしまうのではと不安に考えていた。しかし、毎週1回のミーティングを通じて、各メンバーで意見を出し合いながら、最後までワークショップも終了させることができた。特に、キッズ学芸員プロジェクトでは、なかなか参加者が集まらなかったため、地域の小学校にチラシを配布に行ったり自ら考えて行動できた。活動拠点整備では、期間ぎりぎりになってしまったが、なんとか改修工事も終えることができた。メンバーが減った分、よりいっそうみんなで協力し合いながら活動することができた。課題としては、やはりイベントに関する集客力が私たち学生だけでは弱く、地域の知り合いの方にお世話にならなければある程度集めることができないと実感した。この点に関して、イベントの魅力の見せ方や、より楽しめるものにするための工夫などが足りなかったと思う。

今年度で DIG'S としての活動は終了になるが、近江楽座で得た考える力、実践力をこれからの大学生活、そして社会人生活で生かしていきたい。

活動を通して学んだこと

今年度メインの活動であった西の湖ワークショップはエコキャンパスプロジェクトさんとの共同開催で、楽座団体の運営のノウハウ等を共有し、お互いに学ぶことが多かったように思う。参加者確保が不十分だった点は悔やまれるが、子ども達へ丁寧な解説ができ、西の湖の魅力を十分に伝えることができた。

澤田可奈子（環境建築デザイン学科 3 回生）

DIG'Sに入って今年度、初めて大きなイベントに参加することができ、様々な経験が出来ました。イベントに来た地元の方との交流や活動する中でいろんな人々と関われたことがすごくよかったです。

近藤知奈美（地域文化学科3回生）

今年度の活動を通して学んだことは、ワークショップを企画し、参加者を集めることの難しさです。子どもたちに分かりやすく学んでもらえることを企画し、広報の仕方で楽しそうと思わせることが重要だと感じました。また、自分たちが目標に対して行動的になることが大切だと思いました。

米田紗弥加（環境建築デザイン学科 3 回生）

私は、活動を通して学生が地域で活動することの難しさを肌で感じることが出来たと思う。また、慣れないことが多く上手く行動出来ないことが多かったが、活動を通して学べることもあったのでよかったと思う。

山田沙希（環境政策・計画学科1回生）

地域の方のコメント（抜粋）

ボーダレス・アートミュージアム NO-MA 学芸員　横井悠さん
（イベントを主催し DIG'S に協力を依頼した方）

2013 年 8 月 3 日、企画展「対話の庭」の関連イベントとして、ワークショップ『あの日の思い出は何色？記憶のジュエリーを作ろう』を DIG'S と共同で実施しました。出展者で現代アーティストの林智子氏を招き、私達が体験してきた思い出をもとに、ジュエリーを作るという企画です。生活感の残る近江八幡の古い町屋で行ったことで、参加者は、日常の中の些細な思い出から、心に刻まれた記憶まで、深く自身と向き合うきっかけに繋がりました。また、予想していた定員を超える参加者数でありましたが、滋賀県立大学の学生さんたちのご協力のおかげで皆が楽しんでいただけるイベントとなりました。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 環境政策・計画学科　井手慎司

DIG's のプロジェクトは、近江八幡市の人たちに、まちに対する愛着や誇りを持ってもらうこと、誇りあるまちであることに気づいてほしいとの気持ちで始まった。そのために何をやったかについては、この報告書や過去のものに述べられた通りである。ただ、それによって上記の目的がどれだけ達成できたか、を評価することは難しい。プロジェクトが何を残せたかという評価も、学生の学びという点においてなされるべきである。そう考えれば、うまく行ったことは、学生たちの自信となり、うまくいかなかったこともまた、学生たちにとって貴重な経験になったに違いない。その意味で、DIG's のこれまでの活動に参加したすべての学生に「君たちは、他に換え難い経験を積んだのだ」ということを言いたい。胸をはって、プロジェクトに終止符を打ってもらいたい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

アジサイ剪定ワークショップ

西の湖ワークショップ。チラシ , ワークブック

年間活動冊子

03 男鬼楽座

茅葺でつなぐ男鬼の未来

男鬼(おおり)楽座は、彦根市男鬼町を中心とした山間集落の可能性と文化的景観の保存と活用を考える団体です。2007 年から茅葺き屋根の補修・葺替えに取り組んでいます。湖北古民家ネットワークの城楽邸イベント「古民家塾」に積極的に参加しています。

TEAM DATA

チーム名： 男鬼楽座
代表者： 本保輝紀（人間文化学部）
メンバー数： 25 名
指導教員： 濱崎一志、石川慎治（人間文化学部）
活動場所： 彦根市内、多賀町
関係団体： 湖北古民家再生ネットワーク
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT 実施事業

(1) 男鬼地区での茅葺き屋根葺き替え事業
★見出し写真：葺き替えイベント (07/15)

(2) 城楽邸での茅葺き屋根事業

(3) 茅刈りイベント

茅刈り (11/23)

茅下ろし (12/04)

(4) 古民家再生塾参加

(5) ブログの更新

(6) 湖風祭　地域文化コレクションへの出展

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

私たち男鬼楽座は、男鬼の歴史的建造物の保存、茅葺きの技術の伝承、結システムの伝承という 3 つの目的を持ち 1 年間活動してきた。

計画していた男鬼での茅葺き屋根葺き替えイベント、城楽邸でのイベント、伊吹山での茅刈りイベントはどれも予定通りに行った。どのイベントにも職人さんをお招きし、その都度、茅葺き技術をたくさん学ぶことが出来た。そして職人さんから教わったことを、自分たちだけのものにするのではなく、他の参加者の方に教えながら、技術の伝承が出来るように動けたのではないかと感じる。イベントの際には毎日反省をし、何をするべきかを考えて自分が一番に動く、ということを一人ひとりが意識できるようになったのではないかと思う。また私たちと同じような活動をしている他大学の方・他団体の方とも一緒になって活動をし、交流を深めることが出来た。こうした活動を通し、伝承していかなければ消えてしまう茅葺き屋根の葺き替えという技術が多くの人に伝わったのではないかと思う。

課題としては、今回のイベントでは男鬼の近くに住む人たち、つまりは地元の人に参加してもらえなかった。ブログでは毎回、イベントの告知や事後報告を行ったが、地元の人たちには広まっていなかったようだ。結システムは地域の中の協力体制であるから、一番伝承しなくてはならない人は地元の人たちであり、地元の人たちが伝承していくことで結システムの再構築が狙える。そのためには、私たちがやっている活動を知ってもらうことが必要だ。ブログだけではなく市の施設にチラシを配るなど、今後は広報の仕方も変えながら、地元の人たちにもイベントに参加してもらえるようにしていきたい。

活動を通して学んだこと

1年間代表として務めることになり、最初は何も分からない中で、先輩や先生のサポートもあり、1年間務めることが出来た。またイベントを通して「人との結びつき」の大切さを実感した。楽座を通して多くの人に出会わせてらった。出会えた人に感謝したい。

本保輝紀（地域文化学科3回生）

過疎化が騒がれる中、私はどこか他人事のように感じていた。だが男鬼の廃屋を見てから一変し、身近な問題として考えるようになった。これから地域間格差はますます激しくなるだろう。景観の保持などを目的に活動しているが、そういった問題にも関心を持つきっかけになることを願う。

岡本香菜（地域文化学科3回生）

活動を通して学んだことは、イベント主催にあたっての「責任」の重さである。参加者の皆さんはイベントに協力・参加するために、多忙なスケジュールの合間をぬって遠方から駆けつけて下さっていた。しかし、そんな皆さんへの連絡不足等、運営者である私たちの管理の甘さが目立った。失敗の反省を来年度に活かしたい。

山本紗佑里（地域文化学科3回生）

地域の方のコメント（抜粋）

城楽邸家主　城楽直さん

築150年以上の余呉型古民家。私が育った家であります。昔は毎年少しずつ屋根の葺き替えを村の年配の方々にお願いしていましたが、4年前から古民家は空き家となりました。実を言うと、子どもの頃はこの家があまり好きではなく、冬は寒いし、すすは落ちてくるし「自分も瓦屋根の二階建ての家に住みたい」と内心思っていたのです。見向きもしなかった萱の葺き替えを塾生や学生さんに交じって作業に加わるうちに、協働作業の楽しさを感じ、「この作業には日本人の住の原点があるな」という大それた思いさえ持つようになりました。昔は屋根の葺き替えは村人総出で、お互いに作業を助け合う「結い」の精神で行っていたことに思いが及びました。男鬼楽座の皆さんはいいところに眼をつけてくれました。若い学生さんたちが日本の原風景に溶け込み、後輩たちにも伝えていってくれることはとても価値のあることです。

指導教員より（抜粋）

人間文化学部 地域文化学科　濱崎一志

今、茅葺きの屋根が危機に瀕している。茅葺き屋根を維持していくには、「結い」の復活が大きな課題であるが、少子・高齢化が急速に進む湖北・湖東においては、地域社会の中で「結い」を再構築することは困難である。学生や一般市民のボランティアを含む新しい「結い」の構築が喫緊の課題である。同時に、伝統的な民家を地域資源ととらえ、地域の活性化に資する方法を確立することが、地域社会と伝統的民家を持続可能な形で次代に伝えていく上で不可欠である。こうしたことを男鬼楽座の活動を通して体感できたのではと考えている。

DELIVERABLE　成果物／制作物

茅葺き屋根葺き替えイベント

茅刈り体験イベント

04 信・楽・人 ー shigaraki field gallery project ー

信楽の魅力を引き出し、発信！

信楽の散策路で窯元や職人さんと一緒に信楽の魅力を発見し、信楽焼やタヌキなど信楽でしかできないことで企画を考え、地元のイベントに参加します。窯元から頼まれた依頼を学生が取り組むことで、まちを盛り上げています。

TEAM DATA

チーム名： 信・楽・人ー shigaraki field gallery project ー
代表者： 町口久貴（環境科学部）
メンバー数： 9名
指導教員： 印南比呂志（人間文化学部）
活動場所： 甲賀市信楽町長野
関係団体： 窯元散策路の wa
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT 実施事業

(1) まちなか芸術祭販売・展示・企画

THE TANUKI 成形 (08/06)

まちなか芸術祭ワッフル販売 (10/13)

(2) Shiroiro-ie メンテナンス

(3) 窯元 de アートな野点

(4) 駐車スペースの改修、デザイン

(5) イス制作

(6) 4月窯元散策路イベント準備
★見出し写真：陶ビーズ作り (03/14)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は二回生と一回生が中心で上級生がいない状態で、当初は信楽人がどのような繋がりで何を目的に活動していけばいいのかわからないのが現状であった。そこで、これまで先輩方が築いてきたものを知り、散策路という場所がどういう場所でどんな人たちがどんな思いで盛り上げようとしているのかを知り、そのために地域の人たちと関わり、深く関係をつなげていくことを重視しました。

まず、4月のイベントの参加では、散策路の窯元で陶ビーズの制作をし、イベント中は散策路の方に部屋を貸していただき泊まりで活動し、食事などを通して、地域の方と距離を近づけることができました。そのおかげもあり散策路での情報や、信楽人の活動など共有することが増え、10月のまちなか芸術祭にもスムーズに話が進み、予定していなかったおかみさん会のイベント、信楽での火祭り、コンサートの参加のお話などもいただくことができました。また、窯元に意見調査をしていくという予定もあったが、窯元散策路が甲賀ブランドに認定され、視察などが散策路に来るようになり、散策路が評価され始め、窯元の意識や目標が全体的にまとまりだしたため調査の必要はないと判断した。そこで、まず学生が散策路のことを知ることを目的に、ひとつひとつの窯元を回りどのようなものがつくられ、どのような思いがあるのか、メンバーが知る機会を設けた。

今後は、これまで作り上げた先輩たちの成果物や結果を残し、信楽で出会ったひとたちとの繋がりを大事にしながらさらにその繋がりを広げていく。そして学生の目線や立場からでなければできないことで散策路の魅力を発見し観光客や地元の方に知っていただけるような活動を続けていきたい。

活動を通して学んだこと

私は信楽で社会を学んだ。信楽という陶器のまちではみんなが仕事をしながら活動している。そこでは大学では体験できないことばかりで。ものをつくることや、商売、人と人の繋がりなど相手側の立場など考えなければならないことが多くあり、社会人になって体験することが学生の内に学べた。

町口久貴（環境建築デザイン学科 2 回生）

人に動いてもらうこと、そして一つのイベントを成功させることは思ったよりも大変であった。地域の方との連絡がおろそかになるのはいけないのはもちろん、メンバー内での伝達はしっかりする必要がある。地域の方、メンバーに余裕をもって連絡や情報を伝えることが大事であることを経験して学ぶことができた。

川井茜里（環境建築デザイン学科 2 回生 ）

活動の中で一番大切なのは地域の方とのコミュニケーション。しかし、それが一番難しい。失礼な事は言えない。しかし、気を使いすぎてもいけない。本音で話した時こそ良い結果につながった。学生なのだから少しのわがままも許される。学生らしく失敗を恐れずにやる事が大切だと学んだ。

浅井翔平（環境建築デザイン学科 2 回生）

2013 年度の活動では新しく入った一年生を引っ張っていかなければならない立場となった。一年生との会話の中で、まだ自身の知識が不足しているということを感じ、今までとは違う視点で見た意見を知った。これから新一年生を迎えることになるだろう。頼れる先輩としてより活動に励みたい。

井上優里（生活デザイン学科 2 回生）

地域の方のコメント

ますみ窯　上田ますみさん
（ぶらり窯元めぐりで開催したイベントの共同主催者）

信楽人の活動は Shiroiro-ie や Ogama の改修をしたことを知っている。ぶらり窯元めぐりだけでなく、まちなか芸術祭やイベントでよくがんばっている。散策路で何かしようとしても、利益や力仕事など社会人にとっては生活に関わる仕事をおろそかにできないので一歩踏み出しにくい。しかし学生がその一歩を踏み出してくれるので私たちは若いエネルギーに後押しされ頑張ることができる。このように学生が継続的に散策路に来てくれることは嬉しいのでこれからも信楽人には頑張って活動してほしい。私もギャラリーやワークショップのスペースを作ったり散策路に来ていただいた方が見るだけでなく実際に触れたり体験したりして楽しんでほしいので、これからも信楽人のアイデアや活動に期待しています。

指導教員より

人間文化学部 生活デザイン学科　印南比呂志

夏の台風の被害が深刻だった信楽も活気が戻り始めている。不通になっている信楽鉄道の再建もはじまっている。そんな伝統産地の現状のなかでも学生たちの活動は続けられた。これまでの先輩たちが進めてきた施設の改修や拠点づくりなどハード面での活動によって得られた地域での信頼が、人との繋がりをさらに拡大している。さまざまな地域イベントに参加することで、まちづくりに対する姿勢と活動の視点がうまれている。信楽人の OB、OG たちも信楽で社会人、地域人として活動を始めている。そんな彼らの姿が学生たちには頼もしくもあり、またリアルな地域活動の姿を学ぶこともできているはずだ。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

樽ベンチ

THE TANUKI
（まちなか芸術祭記念事業参加）

< その他成果物 >
shiroiro-ie 塗装
ミニ狸制作
オリジナル皿制作
パッケージデザイン試作
陶ビーズ制作
ワッフル調理販売

05 かみおかべ古民家活用計画 － SLEEPING BEAUTY －

三方よし（地域・学生よし・古民家よし）

上岡部町にある古民家にて改修やイベントの開催、畑づくりなどを通して地域の方と交流活動しています。改修では家の造りを学びながら手作りで進め、イベントでは学生が運営し、海外留学生を招いたグローバルな企画も行っています。

TEAM DATA

チーム名： かみおかべ古民家活用計画
代表者： 石森結衣（環境科学部）
メンバー数： 23 名
指導教員： 林宰司（環境科学部）
活動場所： 彦根市上岡部町
関係団体： 上岡部自治会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24**

PROJECT **実施事業**

(1) 古民家改修事業（壁塗り WS, 床畳入替）
★見出し写真：壁塗りワークショップ (06/29)

(2) イベント開催事業（新歓 , 梅酒作り WS, キャンドル作り WS, お月見イベント , 薪ストーブ WS, 世界料理教室 , クリスマス料理教室 , 餅つき大会）

クリスマス会 (12/23)

(3) 畑づくり・運営（畑づくり WS）

(4) 地域行事への参加（太鼓登山 , ホタル観察会 , 川掃除 , 地蔵盆 , 道普請 , 秋祭り , 運動会 , 湖風祭）

太鼓登山 (04/14)

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

この一年間、交流の場づくりという観点から言えば随分積極的に活動し、実際に成果も上がってきている。また昨年度と比較すると古民家の改修作業も着実に進んできているといえる。昨年度の夏と今年度の夏の 2 回、美術部が古民家で夏合宿を行ったが、その評価は好評であった。しかしながら冬場はまだ普通に過ごすことさえ困難な点も見受けられる。

今年度の反省点としては、改修活動などの際の人数確保に苦労したということが1つ目に挙げられる。食卓イベントではメンバーの参加率は高かったが、改修活動では「かみおかべ古民家活用計画」に参加していない、いわば助っ人を用意しなければ人手が足りないということもしばしばあった。また活動の計画性についても見直しが必要であるように思われる。改修作業は勿論のこと、結果的には成功している各種イベントもやや場当たり的であり、準備不足を感じることもしばしばであった。

今後、スムーズで的確な活動を行うために、計画性を持つ必要があり、それを実現するための体制作りが重要であろう。プロジェクトメンバーの代替わりのこの時期、２年間の反省と経験を生かした体制作りを目指したい。

活動を通して学んだこと

活動が始まった当初は町内の認知度も低く、学生が何をやっているのか、わからないという声もありました。そこで今年度は広報に力を入れ、活動内容を町内に発信する努力をしてきました。その甲斐もあり次第に認知度も上がりつつあります。学生間だけでなく地域の方との情報共有も大切であると学びました。

石森結衣（環境政策・計画学科 2 回生）

かみおかべに入り、早 1 年が経過しようとしています。活動を通して気付いたことは、地元の方との交流は難しいということです。いつ、何をやると決めても連絡が上手くいかず、参加人数が少ない時もありました。連絡手段が今後の課題です。また何度か顔を合わせることにより、交流を深めていきたいです。

土井隆志（地域文化学科1回生）

この一年間、私たちが活動を行っている古民家で地域の方がたくさん来てくれたことが嬉しかったです。古民家の改修工事は、初めての体験だったですが専門の方に改修のやり方を学ばさせていただきました。企画を考えることは難しかったですが、楽しみながら活動を行えて良かったです。

川西祐一（地域文化学科1回生）

かみおかべで民家の改修や、イベントへの参加を通して学校での座学では学べない地域の方々との交流の楽しさや大切さを学びました。それと同時に、イベント活動等を多くの人に知ってもらう難しさも実感し、ポスターの制作では、どうすればわかりやすく伝えられるのかを考えさせられました。

保科真喜子（生活デザイン学科1回生）

地域からのコメント

上岡部町在住　大西弥恵子さん
（「もぐもぐごはん会」、「クリスマス会」に参加）

小さな子どもと外出する場合、荷物が多いし、だっこで車に乗せたりとなかなか大変です。だからと言って、毎日家で遊んでいる訳にもいかず…。そんな子育て中の私にとって、「かみおかべ Sleeping Beauty」は非常にありがたい場所となっています。気軽に歩いて行ける、行くと学生さん達が子どもに話しかけたり遊んだりしてくれる、さらに手作りのお料理まで頂ける。イベントの告知がある度に、子どもと楽しみにしています。これから、ますます親しみやすい場所になるよう、期待しています！

指導教員より　（抜粋）

環境科学部 環境政策・計画学科　林宰司

改修作業が予定より遅れていましたが、抜けかけていた母屋の床の改修を完了させ、行事に使いやすくなったことが大きな成果であると言えるでしょう。改修作業に人手が集まらず進まなかったことが課題ですが、他のチームとのコラボレーションや、他大学の建築を専門とする学生などに声をかける範囲を広げてみるのもよいのではないかと思います。イベントについては、参加人数が少ないながらも子ども向けの内容で一定数の参加者があるようですので、地域の需要を考えて工夫するとよいでしょう。地域診断では、集落の方々も必ずしも皆が知っているわけではない貴重な地域資源が見つかりました。地域資源についてまとめた広報誌を発行してみるのも地域に貢献できることになるでしょう。

母屋の改修が完了し、最低限の居所ができましたので、来年度はメンバーの何名かが居住し、地域とのさらなる交流と改修作業が進むことを期待します。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

かみおかべ SB 通信発行

第 20 回「住まいとコミュニティづくり活動助成」報告書（HC 財団）

＜その他成果物＞
クリスマス会チラシ
もぐもぐごはん会チラシ

06 とよさらだプロジェクト

耕作放棄地を整備し野菜づくりを行う

犬上郡豊郷町で、耕作放棄された農地であるビニールハウスと露地を借り、野菜作りを行っています。地産地消の促進や無農薬野菜の提供、野菜作りの体験や地域とのつながりを目的として活動しています。

TEAM DATA

チーム名： とよさらだ
代表者： 高橋啓介（環境科学部）
メンバー数： 10名
指導教員： 増田佳昭（環境科学部）
活動場所： 犬上郡豊郷町
関係団体： 豊郷町役場
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 **H21** **H22** **H23** **H24**

PROJECT 実施事業

(1) 農家さんとのお米づくり

(2) 地域イベント参加

桜高新入生歓迎会 (05/05)

(3) 坊っちゃんかぼちゃの植え付け準備の手伝い

(4) 畑、ビニルハウスの整備

ビニールハウス修繕 (03/04)

(5) 作物の栽培、収穫、販売
★見出し写真：さつまいも植え (05/26)

(6) 農と食のコーディネーター養成講座参加

(7) ミツマルシェへの参加

(8) とっとまつり出店

(9) 毎月第三日曜日の朝市

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の活動は去年度より活動が低迷してしまった。これは作業に参加する人が少なく、ハウスの管理などの最小限度の作業しか行うことができなかったためである。そのため、イベントがあっても参加できず、イベント参加することによる地域貢献などを行うことができなかった。

今年度も野菜栽培の面で失敗することがあった。今回は夏野菜が枯らしてしまうことが多々起きた。ひとつの原因としては個々人が忙しいために水やりを怠ったことが考えられる。また、野菜を育てている土壌が悪くなっていることも原因であると考える。水やりしても土全体に水が浸透しないことが起きていた。来年度は地域の人や自分たち自身で勉強し、夏野菜の栽培を成功させたいと考える。

今年度はミツマルシェへの参加でとよさと快蔵プロジェクトとの交流ができた。それによりとよさらだプロジェクトの活動を知ってもらう機会ができた。しかし、去年度に行った県大地域食育推進隊さんとの活動ができなかった。野菜の良さなどを知ってもらえる機会を減らしてしまった。来年度は他サークル、近江楽座との交流を行い、より多くの人たちにとよさらだプロジェクトの活動などを知ってもらう機会を増やしていきたいと考える。

今後の活動としてはまず、野菜栽培での失敗を減らし、とよさらだプロジェクトの目的である地産地消と地域活性をできるようしていきたい。そのために作業の参加率をあげる、土壌の改善などを努めていきたい。また、地域で行われているイベントへの参加、他の近江楽座、サークルと交流することでよりよい地域貢献やとよさらだプロジェクトの知ってもらう機会をつくることにも努めていきたいと考える。

活動を通して学んだこと

初めて、実際に商品として売る野菜をメンバーと一緒に作った。当たり前のように食べている野菜が商品として並べられるまでに多くの苦労があることを感じることができた。農業だけでなく、地域の方々とのコミュニケーションの取り方など難しいことも多々あったが、有意義な時間を過ごすことができた。

山本航平（生物資源管理学科 2 回生）

とよさらだの活動を通して農業の大変さを学ぶことができた。とよさらだでは環境によい農業をしているので作業の数が多く、とても大変であった。しかし、農業で地域貢献をすることは面白く、これからもとよさらだの活動を通して色んな事を学んでいきたい。

上田和幸（環境政策・計画学科 2 回生）

私は活動を通じてたくさんの人々と関係性を築くことの重要性を学んだ。メンバー間の連携はもちろん、地域の方、行政など、各方面とのつながりがあるこの活動は、なかでも地域の方々の協力なしには成立しえないということを実感した1年だった。これからも継続的に活動していける環境作りに邁進したい。

中嶋裕美（地域文化学科 3 回生）

地域からのコメント

豊郷町役場産業振興課　土田祐司さん

とよさらだプロジェクトさんの2013 年度の活動は、私たち豊郷町役場職員や豊郷町にとって大きな効果があったと思います。

とっとまつり、町内農家との米作り等に参画、ご尽力いただいたことは豊郷町民および地域の活性化につながっています。若い力と発想は、行政や農家にとてもよい刺激になっています。今後も、引き続き活発な活動をお願いしたいと思います。更なる豊郷町の活性化、とよさらだプロジェクトの益々のご発展を期待しております。

指導教員より

環境科学部 生物資源管理学科　増田佳昭

2009 年に始まったと活動もすでに5 年が経過した。当初、豊郷町の空きハウスを利用しての野菜作りと生協食堂への販売、直売所への販売などを行ったが、その後朝市への参加や地元の祭りへの参加、湖風祭での販売などイベントへの参加も増えてきた。さらに、地元農家の米作りに参加したり、坊ちゃんカボチャ栽培のお手伝いをしたりするなど、地元の農家との交流も深めてきた。また、滋賀県の食育コーディネーター養成講座、生協総代会、地元学入門講義などでの発表など、その成果の社会的発信も行ってきている。近江楽座活動として着実な成果を上げていると判断でき、とくに、今年度は地元との交流に力を入れてきたように見受けられる。地元行政や農家からも喜ばれている様子である。

今後期待したいこととしては、いわば本業ともいえる野菜栽培の確立である。栽培についてももう少し勉強しながら、作る喜び、売る喜び、食べる喜びを体験してほしいと思う。学生生活が多忙な中での「通勤農業」は苦労が多いと思われるが、メンバーの協力関係を作り上げながら、安定した栽培ができるような努力が期待される。受け身のイベント参加にならないよう、自分たちの足下を見つめ、メンバーでしっかりと話し合いながら、主体性をもった活動を続けてほしいと思う。

DELIVERABLE　成果物／制作物

春菊など野菜収穫

新入生歓迎チラシ

07 S（Saigai&Shiga）T（Taisaku&Tanoura）交流推進プロジェクト

被災地と滋賀をつなぐパイプ役！

震災後、南三陸町田の浦で、ほたてあかり、木興プロジェクト、未来看護塾などの楽座チームが活動してきました。こうした学生達と田の浦の繋がりや、支援活動を通して生まれた滋賀の地域の方々との繋がりを活かし田の浦の復興を支援します。

TEAM DATA

チーム名： 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
代表者： 広瀬優樹（環境科学部）
メンバー数： 12名
指導教員： 鵜飼修（全学共通教育推進機構）
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦、滋賀県各地
関係団体： 田の浦ファンクラブ
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1) 田の浦における交流イベントの開催（クリスマスイベント、未来看護塾との合同イベント、海の運動会など）

★見出し写真：海の運動会 玉入れ (08/17)

クリスマス会餅つき (12/22)

(2) 滋賀県内での防災意識啓発活動（防災シンポジウム）

防災シンポジウム (06/22)

(3) 田の浦ファンクラブ事務局活動の支援

(4) 定例ミーティング

(5) 復興支援グッズなどの販売

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

2011年3月に発生した東日本大震災で被災した宮城県南三陸町歌津地区田の浦に、滋賀県立大学の学生が定期的に訪問して、番屋の建設やエコキャンドルによる仕事づくり、交流イベントの開催などの様々な支援活動を実施してきた。このような活動で築かれてきた信頼関係があるため、今年度も様々な活動ができたと実感している。

田の浦では生業である漁業が再開され、ハード面での復興も徐々に進んでいる。しかし、今後は日常生活などのソフト面での支援が必要となっている。学生サポートチームの活動では、このようなソフト面から田の浦の人々を支援することを目指している。

田の浦ファンクラブ学生サポートチームは今年度採択された新規プロジェクトであり、試行錯誤を重ねながら事業を行ってきた。今年度は主に交流イベントの開催を行い、田の浦の人々と地域内外の人々とのつながりを継続させると同時に、初めて田の浦を訪問する社会人や学生を増やすことで新たなつながりをつくることもできた。学生にとっても、この活動で田の浦の人々との交流を通して、人とのつながりの大切さを学ぶことができた。

一方で、田の浦の人々を滋賀へ招き、震災の体験談や復興の現状を通して防災について考えることで、滋賀県における防災啓発に貢献した。また、復興支援グッズやニューズレターなどを活用しながら、田の浦での活動の認知度を上げることができた。

次年度も田の浦の人々とのつながりを継続させるために、今年度の活動で得たノウハウや反省点を次年度の活動につなげていきたい。今後の課題としては、メディア掲載や広報活動を通して、田の浦での活動をより多くの人に知ってもらい支援者を増やすことが必要であると考える。

活動を通して学んだこと

私が今年度の活動を通して学んだのは、東北へ学生が足を運ぶことの大切さである。イベントを開催して現地の方々に参加していただくのはもちろん、その場に滋賀から来た学生が居て、笑顔で過ごしていることが現地の方々に元気を与えているのだと実感した。

吉田大樹（環境政策・計画学科１回生）

私は活動を通して、相手の立場に立ってものごとを考え行動することを学んだ。イベントを企画し運営する側として、いかに田の浦の人々に楽しんでもらえるか、そして地域内外の人々と田の浦とのつながりについてメンバー全体でより深く考えていきたい。

広瀬優樹（生物資源管理学科２回生）

私はこの活動を始めて、ボランティアしているのではなく、「復興のお手伝いをさせていただいている」という考えを持つことの大切さに気付いた。どれだけの年月を経ても、またどれだけ離れていても、被災地の方と関わり続けることでいつか頼ってもらえるような存在になりたい。

大溝奈緒（境政策・計画学科１回生）

地域からのコメント

田の浦契約会・会長　佐藤久次さん

震災による津波がものすごい速さで押し寄せてきて、55 軒が被害に遭った。当時の漁師全員が海の仕事はしないと言ったが、3 年間でここまで復興したことに驚いている。海の運動会は最高だった。みんなが学生の企画するイベントを楽しみにしている。学生が来てくれることがうれしい。

田の浦行政区・区長　千葉昇一郎さん

みんなと話したり、学生と冗談を言い合ったりして、若いパワーを感じることができる。海の運動会のウニ取り競争が楽しかった。震災がなかったら、学生が来ることもなかったし、こういうこともできなかった。学生が田の浦に来てくれて、本当にありがたい。

千葉吉之さん

学生が来てくれると嬉しいし、顔を見ただけで和む。また、学生と話すと安心するので、今後もいっぱい話をしたい。今年度のイベントで最も楽しかったのは、海の運動会で特に綱渡りは盛り上がった。地元の人だけではできないことだと思う。今年度行った海の運動会は、人が集まるきっかけとしての第一歩だった。

指導教員より（抜粋）

全学共通教育推進機構　鵜飼修

2011 年6 月からの宮城県南三陸町歌津田の浦地区での活動も 2 年9 ヶ月が経った。未曾有の大震災から生活の再建を目指している皆様のところでお世話になるのは複雑な心境ではあるが、幸いにも良き理解者に恵まれ、地元の方とよそ者との交流の形が出来上がってきた。残念ながら学生達の活動は社会人としては目を覆うものもあるが、幸い、地域の方々には温かく見守っていただいている。しかし、そうした表面上の評価を真に受けず、地域の人々の立場に立って、真摯に、自らがなすべき事を実行することが大切であろう。今年度は、1,2 回生が中心であり、ぎこちないものであったが、今後は、イベント開催のノウハウ以上の「地域との対話力」と「まちづくりの実践手法」を修得することを期待したい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

海の運動会チラシ

クリスマス会チラシ

＜その他成果物＞
ニュースレター
キャンドルナイトポスター

08 地域博物館プロジェクト

地域とともに歩む博物館づくり

民具や古文書、お祭り等、地域には多くの文化財があります。私たちはそうした"地域文化財"や地域の歴史文化を住民の方達とともに調べ"地域博物館"をつくることを目的に活動しています。住民の方々との交流を通して多くのことを学んでいます。

TEAM DATA

チーム名： スチューデント・キュレイターズ
代表者： 佐野正晴（人間文化学部）
メンバー数： 21 名
指導教員： 市川秀之、武田俊輔、東幸代（人間文化学部）
活動場所： 彦根市内、高島市マキノ町、守山市、近江八幡市
関係団体： 白谷荘歴史民俗博物館
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1) 白谷荘歴史民俗博物館調査・展示事業

(2) 下之郷史跡公園活動協力事業

(3) ヨシ博物館文化財レスキュー・展示事業

ヨシ博作業 (08/03)
★見出し写真：ヨシ博物館展示準備 (03/03)

(4) 長浜曳山まつりボランティア普及事業

長浜曳山まつりボランティア (04/14)

(5) 不破氏邸宅展示会事業 ,WS

(6) 『（仮称）滋賀の博物館・美術館英語版ガイドブック』製作事業

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

昨年度は展示やイベントなどを通じ、活動の成果をアウトプットする機会が少なく、今年度の課題としていた。今年度、本プロジェクトが手がけた事業では、いずれも活動の成果を何らかのかたちでアウトプットすることができた。

とりわけ白谷荘歴史民俗博物館の再オープンは大きな成果だった。私たちは昨年度から近江楽座という制度を利用し、「地域博物館プロジェクト」として活動しているが、白谷荘に関する活動はおよそ 5 ～ 6 年前から始まっており、これまでに多くの先輩方が携わってこられた。長浜曳山まつりに関する活動も、3 年前の大規模な調査に端を発し、継続調査や個人的な交流を通じて関係をつくってきた。

そのほかの事業でも、「地域博物館プロジェクト」としての活動だけでは見えてこない部分がたくさんある。今年度の成果が長年の蓄積の上にあることと、綿密なインプットなくして、良いアウトプットはありえないということを強調しておきたい。

1 年間の活動を振り返ると、おおむね当初の計画通りに進んでおり、事業別に見ても問題なく実施することができた。ただ最近では上回生の卒業などにより、人手不足になりつつある。本プロジェクトの最終目的は「地域博物館」という手法のモデル化であり、複数地域で活動することは必要不可欠だ。活動スタイルを維持し、より発展させていくためにも、新たなメンバーを確保することが、来年度に向けての大きな課題である。広報により力を入れるとともに、自分たちの活動をアピールできる機会があれば積極的に活用していきたい。

活動を通して学んだこと

私は、今年から参加させていただき、特に下之郷での活動にはよく参加させていただきました。1年生ということもあり、調査も展示もはじめてで先輩方のお世話になってばかりでしたが、今まではできなかった調査や展示を実際に行うことができ、非常に勉強になりました。良い経験ができてよかったです。

渡邊文乃（地域文化学科1回生）

地域博物館プロジェクトを通じて特定の地域や人々の繋がりを身近に知ることができたと思います。古民家やヨシ博物館での調査から人々の人生や地域を象徴する文化を文書や道具に触れることによって感じ取ることができました。普段の授業では体験できないことを体験できて良かったと思います。

片岡駿一（地域文化学科 3 回生）

私はこの夏から活動に参加し始めたばかりで、さまざまなプロジェクトのうち、関わったものはまだ一部だけです。しかし、普段は入ることのできないような博物館の裏側で作業を行ったり、貴重な体験をすることができました。学芸員に憧れる私にとってはとても魅力的な作業です。

上田睦美（地域文化学科 1 回生）

私は台湾からの留学生で、日本語を習いながら日本の文化についても色々勉強したいと思っています。授業から色々な知識を得ましたがもっと身近で体験したいと思っています。地域博物館プロジェクトの活動を通して日本人と交流することができ、その上日本の民俗を見て、本だけでは得られない知識を得ました。

李崇瑜（地域文化学科 3 回生）

地域の方のコメント

白谷荘歴史民俗博物館　川島光男さん

膨大な古文書・教科書・民具等を前にどのようにして維持をしたらよいのかと困っていたところ、大勢の学生さん・先生方にご協力していただき非常にありがたく思っております。夏は暑い炎天下の中で汗と埃とすすで真っ黒になりながら作業、寒い雪の降りしきる中で手を真っ赤にして寒さに震えながら作業を進めてくださいました。このような活動が周りの皆さんに当館について、より関心を持っていただくことに繋がり、単に民具等の整理・展示・建物の維持保全だけでなく、地域のコミュニティー・観光への広がり・地域文化の保全へと広がっております。学生の皆さん・先生方の指導協力のもと、湖西地域の博物館として、より地域にねざしたしたものにして、忘れ去られようとしている地域文化を守り、さらに地域の交流の場になれるようになればと考えています。

県立大学の大勢の学生さん・先生方には本当に感謝しています。

指導教員より

人間文化学部 地域文化学科　市川秀之

今年度は長年取り組んできた白谷荘歴史民俗博物館の展示が完了し、一応の開館を迎える等いくつかの成果があった。また貴重な資料が風雨にさらされる危機にあったヨシ博物館の資料の救出作業を行い、その後の整理作業をへて年度末には琵琶湖博物館との協働によって同館で展示をおこなうに至ったのも、プロジェクトの大きな成果といえるだろう。重要なのはそのような成果にいたる日々の地道な調査や整理の作業であり、この部分についても積極的な取り組みがみられたことも評価したい。しかしながら、プロジェクトの活動が高度化するにしたがって、他の学生が参加しにくくなったためか、活動に参加する学生が拡大していないのが今後を考えると大きな課題であり、今後の対策が求められる。今後はより地域との連携を深め、多様な活動に取り組んでいただきたい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

「白谷荘歴史民俗博物館」紹介パネル

「ヨシ博物館」展示成果物

＜その他成果物＞

「下之郷遺跡まつり 2013」チラシ兼ポスター
湖風祭でのシャギリ公演会ポスター
ヨシ博物館関連発表スライド
「資料搬出から収蔵まで」
「長浜曳山まつりボランティア」紹介パネル

09 木興プロジェクト

建てる！復興から発展へ

東日本大震災をうけ、「建築・デザインを学ぶ私たちに何ができるのか」という思いをきっかけに、ものづくりによる支援活動を目的としています。南三陸町歌津田の浦にて昨年、建設した集会所の増改築を行います。

TEAM DATA

チーム名： 木興プロジェクト
代表者： 諏訪昌司（環境科学研究科）
メンバー数： 31名
指導教員： 布野修司（副学長）、J.V.ホアン・ラモン（環境科学部）
活動場所： 宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： 田の浦ファンクラブ、未来看護塾
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1) ヒアリング・看板作り

(2) カブトムシ小屋、棚作り

(3) 毎月の訪問

(4) 交流施設増築工事・竣工式

基礎工事 (09/09)

★見出し写真：建て方 (09/14)

(5) 情報発信・共有

全国公立大学学生大会 (10/12)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度はヒアリング・看板制作をメンバー全員で行うことにした。ヒアリング調査では、田の浦全体を5つのグループに分けて行ったため、一部分に偏ることなく行うことができ、今の暮らしについて話してくれたり、見せてくれたりした。看板制作では技術向上以外に、現地で実際に作業を行うということの練習でもあった。やはり問題が発生して、作業スペースが狭いことや、何もしていない人がいるなど、現場は問題だらけだった。カブトムシ小屋、棚作りは技術向上だけでなく情報発信の発展を目指した。カブトムシ小屋制作後、小学校でシンポジウムを行ったり発展が見られた。交流施設増築について、室内が広くなり地域のイベントも行える規模になった。竣工式後すぐに舞台のイベントが行われることになり、地元の大工さんが解体可能な舞台上をさらに増築した。今後は椅子や机、棚などの家具や避難道などの周辺整備が必要になってくる。

情報発信については、多くの発表の機会で意見を沢山頂き、改めて反省点や今後についての問題が浮かび上がった。そして、他のプロジェクトと情報共有をし参考になった。現在、宮城大や名城大と連絡を取り、更にネットワークが広がりつつある。また、防災まちづくりワークショップの事業を行うことができなかったが、公立大学学長会議全国公立大学学生大会で、「防災まちづくり」をテーマにこれから全国各地でどんなことが学生にできるかを議論し、この機会をきっかけに全国公立大学の学生たちと繋がった。今までの経験を踏まえて今後地域に役立てられたらと思う。

今後について、これからのどのように田の浦と関わっていくかが重要である。木興プロジェクトとしては「どこで、なにをやるべきか」今一度考え直す時期にきているため、慎重に調査を行い、他のプロジェクトと連携し話し合いを進めていきたい。

活動を通して学んだこと

責任を持って活動に取り組むことが大切である。多くの人々の協力があり交流施設を増築することが出来た。作業期間中にイベントをして地域の人とコミュニケーションを図る機会を設けると良かったと思う。

諏訪昌司（環境科学研究科環境計画学専攻１回生）

一番に讃えるべきは木興プロジェクトではなく私たちを受け入れてくださった地域の方であるということ。そして、写真やマスメディアを通して地域の方の偉大さは伝わっていないことが多く、マスメディアに取り上げられる私たちの活動は単なるニュースであるということ。

川勝知英子（環境科学研究科環境計画学専攻１回生）

建設を行うという行為を通して、田の浦と関わることが出来た。月に一度田の浦へ足を運ぶ度に、地区の人に顔を憶えてもらえ、名前を憶えてもらえ、相互の関係が深くなることを肌で感じた。その中で、地域に必要なこと、足りないものを聞き出すためには、継続的な関係を築くことが大切だということを学べた。

宮武侑平（環境科学研究科環境計画学専攻１回生）

震災から３年がたち、継続的な活動の中で被災地の状況や人々の変化を感じることができた。これから地域の方とのコミュニケーションがさらに大事になってくることを感じた。

藤澤泰平（環境建築デザイン学科４回生）

地域の方のコメント

田の浦地区の奥様方

増築して内部が広くなったことは良かった。このような寒い日(2014年3月11日）でも、暖かい居室で地区の人や学生が多く集まることができる。このような休み場があると大変助かる。以前、鳴子温泉から日本舞踊のボランティアが来られ、その会場として使用した。去年建設した八畳の居室は楽屋として利用し、舞台は地元工務店が制作した。震災以降、人の集まることの出来る施設がなかったため、日本舞踊を見る機会は全く無かったが、この施設のおかげで観ることが出来た。震災前に行っていて現在は行っていない新年会や、別の施設を借りて行っている役員会など交流施設を借りて集会を開くことが出来そうだ。暖かくなってきたら、全面の庇の深い場所でおしゃべりしたい。丁度この場所はゴミ捨てにもくるし、行き易い場所にあるからおしゃべりするには最適だと思う。

指導教員より　（抜粋）

環境科学部 環境建築デザイン学科　J.V. ホアン・ラモン

今年、木興プロジェクトは、設計に関するリデザインである。再構築を自分たちだけで考えることは決して易しいことではなかった。今年の提案は、少ない予算で昨年つくったコンパクト空間を改善し拡張することができた。この建物は、外部空間をより関連付けてコミュニティのために多くの特徴を備えて、機能を強化した。施工は容易ではなかった(準備、基礎設計の時間不足による遅れ) が、結果は田の浦の人たちに新しい多目的スペースや満足を与えるものとなっている。

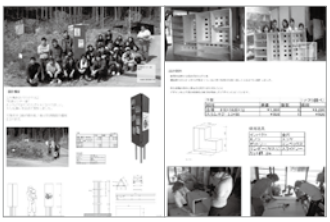
副学長　布野修司

木匠塾は、高根村（岐阜県）→加子母（中津川市）を長年フィールドとしてきたが、2011 年から3 年間、東日本大震災の復興支援を趣旨とする「木興プロジェクト」またNPO 環人ネットと連携して、南三陸町田の浦を現場とすることになった。番屋建設、移築、集会所建設、増築という一連の活動において、多くを学んだと思う。おそらく、建築を考える原点であり続けるであろう。地域とともにある建築のありかたについても学んだ筈である。地域の人々に育てられたのだということを忘れないで欲しい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

カブトムシ小屋

交流センター



看板、銀座商店街の組立て式棚

10 Taga-Town-Project

学生から見た多賀の魅力を発信

多くの人に多賀の魅力を知ってもらうため、コト・場所・人を取材する「多賀暮らし図鑑プロジェクト」、交流イベントを開催する「八百秀アパートプロジェクト」、町からの依頼に応える「お手伝い引き受けますプロジェクト」(新規)を主な活動としています。

TEAM DATA

チーム名： Taga-Town-Project
代表者： 宮浦栞（人間文化学部）
メンバー数： 22 名
指導教員： 松岡拓公雄、迫田正美（環境科学部）
活動場所： 犬上郡多賀町
関係団体： (有)A.SITE、多賀町役場、多賀区子供会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT 実施事業

(1) 八百秀アパートプロジェクト
★見出し写真：庭のすのこづくり (06/09)

一箱古本市 (休憩所出張）(06/16)

(2) 多賀暮らし図鑑プロジェクト

(3) 広報プロジェクト

(4) お手伝い引き受けますプロジェクト

(5) まちのお祭りに参加

(6) 多賀と学生の成長記録展

成長記録展＠豊郷 (09/28)

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

1 年間を振り返ると、TTP のこれからの活動を再認識するための転換期となった年だった。拠点となる八百秀アパートの改修も終わり、本格的に町とつながり、多賀の魅力を発信していくため、時には悩みながらもチーム全体で動くことができた。

多賀暮らし図鑑プロジェクトでは引き続き多賀で働く方々に対してインタビューをし、その内容から記事にしていく「色人図鑑」を作成した。今年度は3 名の方の新たに記事を加えることができた。

八百秀アパートプロジェクトは特に庭の改修に力を入れた。庭に入るためのアプローチの整備や災害時の炊き出しにも活用できるかまどベンチの製作、ブルーベリーとサツキを植えるなどをした。その結果、庭でのイベントを開催することができた。

広報プロジェクトでは、今年度も多賀の有線放送で毎月一回の担当番組を放送させていただいた。Facebook・Twitter・ブログといったWeb 関係の広報もちゃんと更新することができた。チラシの配布は今年から回覧板にチラシをはさみ、回してもらえることになった。

その他にも、楽座の他チームの協力もあり、TTP のこれまでの歩みを紹介する「多賀と学生の成長記録展」を開催することができた。また今年度から「お手伝い引き受けますプロジェクト」が始動し、子ども会の方々、参加した子どもたちとその父兄の方々との新たなつながりを築くきっかけにすることができた。

反省点は、スケジュール管理の甘さを改善できず予算を効率よく使うことができなかった。メンバー同士の情報共有もうまくいかないことがあった。この教訓を踏まえ、来年度以降の活動に余裕を持って取り組めるようにし、メンバーと多賀の人々がより楽しめるようにしたい。

活動を通して学んだこと

私が TTP に参加して学んだことは、何か活動することによって人と人との輪が広がるということです。活動を通して、個人では今まで関わりのなかった人とつながりを持つことができました。私は TTP に人と人を繋げる力があると思っています。その一員になって、人と人を繋ぐことができるようになれたらいいと思っています。

浜奈緒子（地域文化学科 1 回生）

多賀町で仕事している人の記事制作を通して、普段何気なく生活して意識されないその人の情熱や仕事に対する意識に触れられ、それを多くの人に知ってもらえるように責任をもって書くことが求められる。またサークルとしての運営方法や意義など団体として活動していくことの難しさも学んだ。

鷲見詩織（人間関係学科 2 回生）

TTP は、多賀町の魅力を学生の視点で見つけて、それを発信していきます。祭りに参加することやイベントを行うことで、町の暮らしや人同士の繋がりを肌で感じ、多賀町に対して自分なりの視点ややりたいことを持つことが出来ます。今まで以上に多賀町に入りこんだ活動をしていきたいです。

淺居里歩（環境建築デザイン学科 2 回生）

多賀の人々が私たちに求めていることと、学生自身が楽しむこと。この二つを両立させることはとても難しい。それゆえ、楽しむことと同じくらい苦悩することもあった。けれども、この苦悩もまたTTP でないとできない経験であり、必ず将来につながるものであると思う。貴重な経験をもたらしてくれる多賀の人々とTTP に感謝したい。

小川大輔（地域文化学科 2 回生）

地域の方のコメント　（抜粋）

多賀区子ども会会長　園田睦雄さん
（お手伝い引き受けますプロジェクトで開催した七夕まつりの共同企画者）

県立大の学生さんが地域に入って活動されている事を知り、「もし良かったら子ども達とも係わってもらいたい、勉強も教えてもらえないか?」との思いから声を掛けさせていただきました。事情をお話すると、早速劇や折り紙などアイデアと見本、進行まで提示していただけた。さすが！でした。当日は子ども達も賑やかに楽しい時間を過ごさせてもらいました。子ども達の大きな声や笑い声が最後まで続いた一日でしたね。後片付けもサッと手伝ってもらい、感謝です。勉強や活動の大切なお時間を頂き有難く思っています。

指導教員より　（抜粋）

環境科学部 環境建築デザイン学科　迫田正美

本年度は新たに「お手伝いプロジェクト」を開始した。これまで協働してきた商工会や柏の会以外に地域の子ども会との関係を築けたことは大きな収穫であった。地域との関係に新たな1ページが加わっただけでなく、子どもたちやその保護者の方々と交流できたことは活動の幅を広げる転機となるだろう。チーム内の連携を図ることは常に課題であるが、各チームが計画的に進行出来るよう、自分達にあった方法を模索して欲しい。楽座の活動も10 年の節目を迎え、昨年度は豊郷や高宮など他の楽座チームとも積極的に関わることができた。

環境科学部 環境建築デザイン学科　松岡拓公雄

TTP は10 年目を迎え、長寿楽座プロジェクトになった。多賀のイベントの手伝いからはじまり、今では様々に展開している。学生が毎年バトンタッチしながら、継続してきたことを評価したい。同時にそれは学生の尽力によりまちの人々との連携が熟成している証拠でもある。特に今年度は、まちの人が家から出てきて交流してもらう仕掛けを作るなど、さらに多くの多賀の人の意識を高める活動をしてきた。多賀の暮らしをより良いものにすることが使命、目標となっていることは、本当に感慨深い。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

TTP 成長の記録展ポスター、チラシ

一箱古本市（5,6,7 月）

＜その他成果物＞

八百秀お庭プロジェクト
- お庭に集まろう☆かまどベンチ WS チラシ
- やきいもイベントチラシ
- ワークショップ用　作り方解説図
- 階段、庭の図面
- 折り畳みベンチ 脚組立図
- 活動内容チラシ

11 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

子どもたちと楽しく成長

Harmony は将来作業所で働くために必要な社会性や手先の器用さを身につけることを支援したり、障がいを持っているために制限されてしまいがちな障がい児・者ととその家族の充実した余暇活動を支援しています。

TEAM DATA

チーム名： ボランティアサークル Harmony
代表者： 谷口友美（人間文化学部）
メンバー数： 24 名
指導教員： 竹下秀子（人間文化学部）
活動場所： 学内、彦根市、東近江市
関係団体： NPO 法人 障害者の就労と余暇を考える会 メロディー
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1)　定例活動
★見出し写真：定例活動 粘土あそび (04/27)

定例活動　茶道（05/18）

(2)　宿泊体験（夏の泊まり会、冬の泊まり会）

宿泊体験ソーセージ作り (08/10)

(3)　クリスマスコンサート

(4)　カヌー体験

(5)　茶摘み・製茶体験

(6)　お茶会

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、学生の意識改革ということに重点を置き活動しました。10 年以上活動の続いている団体ですが、活動がマンネリ化してしまったり、どのような目的でこの団体が作られたのか、一つひとつの事業が行われているのかということを理解せずに、なんとなく決められた仕事がそこにあるからやるという状態になりがちです。そこで、なぜ、私たちの活動を行っているのかということをメンバー内で共有することで、一人ひとりの学生に活動の意義を理解させ、より充実した活動が行えるように努力しました。そのために、昼休みを利用して勉強会を開きました。ただし、その勉強会の出席率も低くあまり大きな成果を得ることができませんでした。その後は、地道に普段の活動やメンバー同士で食事をする際などに個々にハーモニーの活動について話していきました。そうしていく中で、活動に対する理解はこの一年間で一定の成果を得ることができました。出来なかったことは情報発信があげられます。クリスマスコンサートのチラシやポスター、新入生向けのチラシを作り宣伝をするということは行いました。しかし、ブログや Facebook を利用した具体的な活動状況を外部へ発信するということができませんでした。

今後については、引き続き意識改革に取り組みつつ外部への発信をしていきたいです。意識改革については、受け身の立場の人にも運営側を経験させるということを考えています。また新入生向けの説明会を開ききちんと活動趣旨を理解してもらったうえで参加していただこうと考えています。外部への発信という面では、ブログの更新、クリスマスコンサートの際のラジオ出演を考えています。また OB の方へ向けた連絡もしていきたいと思っています。

活動を通して学んだこと

ハーモニーで子どもたちと関わっていく中で、一人ひとりにその子らしさを感じることができました。どんなことがその子にあっているのか試行錯誤していくことは、難しいことでしたが、確実に私の学びになったと思います。また、どうすることがその子の学びになるのかと考える視点も必要だと思いました。

中辻千絵（人間看護学科 3 回生）

ハーモニーで活動する以前は、子どもと話をする時に子ども目線になって会話することが出来ませんでした。しかし活動を進めていくにつれて、一緒にはしゃぐ事が出来るようになって、子どもの方も以前と比べて心を開いてくれているように感じます。その様な変化を感じられた事も貴重な経験であると思います。

浦部純樹（地域文化学科 2 回生）

harmony に入って、初めて障がいをもつ子どもたちと触れ合いました。以前までは障がいというものに少し偏見を持っていたかもしれません。しかし活動に参加していくうちに、子どもたちの純粋さに惹かれはじめ、子どもたちと接することへの喜びを感じることができました。

大屋久和（人間関係学科 1 回生）

地域の方のコメント　（抜粋）

NPO 法人障害者の就労と余暇を考える会メロディー　藤堂裕美さん

私たちがハーモニーの学生さんに求めていることは、自分たちが楽しい活動です。学生さん、メロディーのメンバー、メンバーの兄弟も楽しんで両親にも笑顔になってもらいたいと考えています。メロディーの皆がハーモニーの手を借りることでより多くの人に出会い、様々な所に行き、自分たちだけでは出来なかったことをできるようになり、世界が広がり成長へとつながります。昨年度は、定例活動で重視しているお茶を3 ヵ月間二人の学生さんが習ってくれました。1日も休むことなく熱心に先生に質問などをして、どのようにメロディーの人たちとやるといいか考えてくれました。次年度はお茶碗を信楽で作ってはどうかという学生さんからの提案もありました。私たち親はすぐにこの子たちにはできないとあきらめてしまいますが、ハーモニーのおかげでやってみようと思えます。楽しいことをあたりまえに同年代の人たちと楽しむ。そんな力をハーモニーから頂いています。

指導教員より　（抜粋）

人間文化学部 人間関係学科　竹下秀子

本年度も概ね計画通りに活動を実施することができた。定例活動のお茶会の内容を改善するため、学生メンバーが茶道の稽古に通うなど、活動の意味を問い、その意義を積極的に高める行動もあった。大いに評価したい。ただし、全ての学生メンバーが主体性を発揮して活動に参加するという状況にないことがコア・メンバーの悩みであり、本年度は、参加意識を高めることを目指した勉強会や会議が行われた。長年の活動ゆえに、当事者や保護者の状況が変化し、活動から離脱するケースもあることは残念だが、新しいメンバーや支援者の輪は広がっている。地域の行事として定着したクリスマスコンサートは本年度も盛況だった。本学の学生サークルや、ご当地ゆるきゃらの応援も得て、地域の人々が楽しめる場をつくることができた。新しい試みとして、東日本大震災への募金活動をしているボランティア団体への協力も行えたことも有意義だった。

DELIVERABLE　成果物／制作物

クリスマスイベントパンフ

クリスマスイベントポスター

12 三階蔵覚醒プロジェクト

おはよう、三階蔵！

全国的にも珍しい三階建ての土蔵、通称・三階蔵を地域資源として活かす方法を考え、実践を試みるチームです。収蔵史料の整理やパネル等の展示作業を行い、将来的には、全国の三階蔵をつなぐ「三階蔵ネットワーク」の構築を目指しています。

TEAM DATA

チーム名： 三階蔵部
代表者： 久保奈緒子（人間文化学研究科）
メンバー数： 21 名
指導教員： 濱崎一志、石川慎治（人間文化学部）
活動場所： 学内、近江八幡市
関係団体： 近江八幡市 文化振興課
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　**実施事業**

(1) 三階蔵公開イベント
★見出し写真：イベント 蔵での説明 (11/30)

(2) 三階蔵パネル展

(3) 先行事例の調査

(4) 湖風祭・地域文化有志によるブースでの広報

(5) 学内における制作活動

第一回打ち合わせ＠近江八幡市立資料館 (06/21)

イベント当日用の展示パネル作成 (11/17)

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の成果としては大きく3点が挙げられる。まず、公開イベント前の 2 か月間に、申請時の計画にはなかったパネル展を開催することができた点、そして公開イベントにおいて、多くの来場者が来てくださった点、最後にイベント当日に三階蔵所有者同士を引き合わせてサミットを開催することができた点である。

パネル化を依頼するために各地の三階蔵関係者と密に連絡を取ったことは、共通のテーマを有する者同士の関係を改めて構築する上で重要な働きかけとなった。これはパネル展を通しての一番の成果だと考える。

三階蔵公開イベントにおいては、地元・近江八幡や湖東地域から来られた方よりも、県外からの来場者の方が圧倒的多数を占めており、地域住民への広報不足が考えられる。プロジェクトのひとつの目標として「三階蔵所有者同士をつなぐネットワークの構築」を掲げていたが、公開イベントの場において2組の三階蔵所有者の方々を引き合わせるに至ったことは、大きな一歩となったと考える。何もかもが初の試みであり、手探りで進めてきたものの、充実した活動内容となったのは、ひとえに協力者の方々のお力添えがあったこと、そしてここぞという場面で学生メンバーが結束して取り組むことができたためだと考える。とりわけ、プロジェクトチームと市立資料館との連携がうまくとれたことが大きい。唯一かつ最大の誤算と言えるのは、近江八幡市民にとって旧八幡町という地域がある種、日常においてあまりにも関心の対象にない、という問題点であった。この課題の突破口としては、子どもたちの学習活動との結び付けがきっかけになるのではないかと感じた。以上を視野に入れ、テーマとともに「フィールド」を重視したプロジェクトの展開を今後の課題としたい。

活動を通して学んだこと

時間をかけて築いた学生メンバーと地域の方々との関係。公開イベントでの一期一会の出会い。立場も、共有した時間も様々だからこそ、それぞれから学んだこと・得たものも多種多様で、どれも貴重な経験となった。ここで得たものを大切にしつつ、けれど常に新しく柔軟な発想で取り組んでいきたい。

久保奈緒子（人間文化学研究科博士後期課程 1 回生）

三階蔵は一般の方にあまり馴染みのないものですが、みなさん興味をもって見学・質問してくださいました。建物以外のことを色々聞かれ、分からない部分もあったので、今後はもっと勉強してからイベントに参加したいです。地元の魅力を再発見できるお手伝いができて、やりがいを感じることができました。

岡本香菜（地域文化学科 3 回生）

イベントが始まる前は、来館者に興味を持ってもらえるのか不安でしたが、多くの方が熱心に私達の話を聞いてくれました。ただ、質問やお話に上手く応えることが出来ないことがあり、来館者や自分たちにとってより実りのあるイベントにするためにも、今後はもっと知識を蓄えて臨みたいと感じました。

服部友美（地域文化学科 4 回生）

地域からのコメント

近江八幡市立資料館（旧西川家住宅）館長　万野牧男さん
（公開イベントおよびパネル展の共同主催者）

三階蔵覚醒プロジェクトの取り組みにより、伝統的建造物群保存地区の旧西川家住宅三階建土蔵を公開することができました。地域の歴史的財産として存在していた「三階蔵」の価値を再発見し、意味のあるものになったと思います。

地元校長も見学し、子ども達が地域（郷土）に自信と誇りをもつ資料として、集会等での講話にも取り入れ、教育的にも活用を図っていきたいとの想いを聞きました。大学が地域に入ることにより（近江楽座により）、多くの地域力の課題発見につながりました。すなわち、そのことが成果ともいえます。なお、滋賀県ではまちづくりの一助として、ヘリテージマネージャー（HM）の活動も始まろうとしています。

今後、このプロジェクトの拡大・深化やネットワーク化などにより課題解決を図り、地域活性化の拠点（核）となる魅力の創出にむけた連携・協働を期待します。

指導教員より

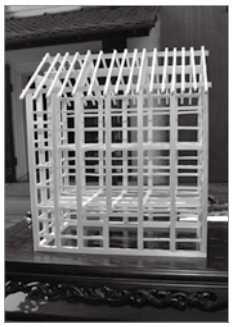
人間文化学部 地域文化学科　濱崎一志

蔵を建てる主な目的は大切なものを収納し、火災や盗難から守ることである。物を効率的に収納するために、蔵の中での動線は短いのが当たり前だと考えていた。

そんな時、三階蔵に遭遇した。物を収納するための建物のはずが、幅の狭い箱階段と、蔵によっては使い勝手を考えたと思えない階段の配置がなされていた。物を収納する空間でありながら何例かは窓に内開きの土戸を設け、空間の利用効率を下げていた。誰に見せるわけでもないのに不必要なまでに太い地棟、登り梁で構成した三階は、家作制限を意識してか、階高が低く、側柱に近寄ると屈んでも動きが取れないものもあった。合理的とは言いがたい建築計画に則って建てられていながらも、何か人を魅了する空間。先人は何を思ってこうした建物を建てたのかを考えているだけで、楽しくなる。そんな想いを皆で共有しながら、保存と活用につながるイベントを展開することができた。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

公開イベントポスター



軸組模型

＜その他成果物＞
冊子「三階蔵覚醒プロジェクト」
パンフレット
展示「三階蔵展」展示パネル 12 枚

13 たけとも ―竹の会所・友の会―

竹の会所の今後を支える

宮城県気仙沼市に、復興の拠点となる場所を作りたい。環境建築デザイン学科陶器研究室を中心として始動した「竹の会所」プロジェクト。それを今後支えていくのが、この友の会です。建物の整備、補修、イベントを行います。

TEAM DATA

チーム名： たけとも - 竹の会所 友の会 -
代表者： 内田佑紀（環境科学研究科）
メンバー数： 40 名
指導教員： 陶器浩一、永井拓生（環境科学部）
活動場所： 宮城県気仙沼市本吉町
関係団体： (株) 高橋工業
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24**

PROJECT 実施事業

(1) たけとも春祭り・秋祭り
★見出し写真：秋祭り (09/21)

春まつり (05/05)

(2) 浜の会所建設 WS

浜の会所竣工式 (09/21)

(3) たけとも便り発行

(4) 竹の会所補修 WS

(5) 日本建築学会「アーキニアリング展」展示

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度は竹の会所での活動のほかに、浜の会所の建設など今までより幅広く活動してきました。また、それに伴い、メンバーもこれまでよりも増え、統率など非常に苦労しました。しかしながら、苦労した分、達成した喜びや、また、現地の方々の笑顔はなにものにも換えがたい経験ができたと思います。また、竹の会所が来年度以降に仮設申請が切れるということで、竹の会所の敷地にこれまでの活動等の記念碑も出来上がり、社会人になっても経験できないであろうことを学生メンバーは経験でき、今年度は非常に密度がある活動になったと思います。

しかし、最近のワークショップにおいて、地域の方々の参加者数が減りつつあります。我々の目的は参加者の数ではありませんが、イベント内容のマンネリ化が原因であれば、これまで以上に学生間で話し合い、新鮮な内容を実施していかなければならないと考えています。または、気仙沼の方々が少しずつ、心の復興を遂げ、我々の活動に頼らずとも、活気溢れるまちになりつつあるのではないかとも感じます。後者のように我々が思う以上に心の復興が進んでいれば幸いです。

今後はまた新たな世代へとたけともの活動のバトンを渡さなければなりません。その際、簡単にバトンを渡すだけでなく、どのようにバトンを渡せばよいかが課題となります。これまで長く活動してきた者の大半は卒業し、経験が浅いメンバーが多くいます。また、来年度以降は竹の会所の解体作業など、非常に苦労するであろうこともあります。そのような中で、今、残っているコアメンバーがいかに、経験の浅いメンバーにバトンを引き継ぐのかが今後の鍵となるでしょう。

活動を通して学んだこと

たけともも、竹の会所の補修や地域とお祭りなどを通した地域との交流を目的として発足して2年以上が経過しました。実際に補修や建設にあたって地域の方の手を多くお借りし、「地域の中で学生を育む」ことを実際に感じ、学生と地域とでどうしたら笑い合えるのかという「プロセスづくり」を学べました。

山田貴大（環境科学研究科環境計画学専攻 1 回生）

浜の会所のワークショップでは、炎天下や雨の日でも、ほとんど休むことなく作業が行われ、汗の止まらない日々が続き、体のつらい毎日でしたが、それと同時にものを作ることを通して自分にも被災地に対して何かできたことがとても喜ばしいことでありました。

高橋和也（環境建築デザイン学科 3 回生）

たけともの活動の中で地域の人々をお招きしてイベントを開催したのですが、後日、あるお母さんから子どもが大変喜んでいるというメールを頂きました。これは私にとってとても嬉しく、喜んでくださる方もしっかりといるのだと実感する事が出来ました。今後も地域の人と交流していきたい。

藤田晴太（環境建築デザイン学科 4 回生）

地域からのコメント

(株) 高橋工業 代表取締役　高橋和志さん

被災地を訪れる大学の関係者、学生は少なくないが、「たけとも」の活動は震災の初年度から持続的に訪ねてこられ、被災地で長期間寝泊まりし、学生の皆さんが各々の役割を持った仕事に携わり、被災地での暮らしを体感している事が大きな特徴だ。そうした中で地域の暮らし、沿岸の人々の営みを実際に体感し、生活するとはどういうことか、仕事をするとはどういうことか、また、学生達が自分の将来について、深く考えるきっかけとなって欲しい。気心の知れた学生の皆さんには、今後も無理のない方法でこれまでと同じように地域に来てもらい、地域の暮らしを学び、学生と子ども達がお互いに成長することができるような交流を続けてもらいたい。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

たけとも便り

春まつり、秋まつりポスター

指導教員より　（抜粋）

環境科学部 環境建築デザイン学科　永井拓生

「たけとも」は2011年の東日本大震災の後、滋賀県立大学の学生を中心に被災地に築かれた「竹の会所」を学生達が自らの手で運営し、被災地の子ども達を支援したい、という理念のもとに始まった活動である。

本年度は、春の連休および夏休みに気仙沼で竹の会所や浜の会所を舞台に手作りの「お祭り」を実施した。学生による屋台やおもちゃ作り、写真展示、工作教室などを企画している。また、11月には竹の会所、浜の会所の台風による被害の点検、補修作業も行っている。

春祭りでは、多くの子ども達が家族連れで訪れにきてくれたものの、準備時間の不足や地域への周知がやや足りなかったこともあり、これまでの回と比べると地域の方々の出足は少なく感じられた。しかし、地域の方には、地域の人々が家族連れで旅行に行ったり、他のところへ遊びに行ったりする家庭が増えて、ここに来る家族が減ったのだ、被災地に少し、元気が戻ってきた証拠だ、よかったじゃないか、という言葉を頂いた。実際に被災地で生活し、被災地の現状や復興の過程、地域での暮らしを学ぶことが、学生達にとって大きな財産となっているに違いない。

14 チーム・バンデイラ・ジ・オウロ

多国籍の子どもによりよい未来を！

多文化共生が求められる現代に、外国籍の子どもたちは多くの教育問題をかかえながら生活しています。そんな彼らがよりよい未来を過ごせるよう、学習支援を行うとともに、異文化理解を深めつつ多文化共生を推進し、地域の活性化を促すことを目標に活動しています。

TEAM DATA

チーム名： バンデイラ・ジ・オウロ
代表者： 高橋篤史（人間文化学部）
メンバー数： 7名
指導教員： 河かおる、武田俊輔、篠原岳司（人間文化学部）
活動場所： 彦根市内、愛荘町
関係団体： 彦根市教育委員会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT 実施事業

(1) レクリエーション事業

★見出し写真：サンタナ学園での七夕イベント (07/11)

トントン相撲の駒を作る様子 (01/25)

(2) 勉強会

(3) 進学サポート事業（中央中学への学習支援）

(4) あおい企画への参加
（彦根学園学園祭出店）

(5) 夏休み子どもクラブ・冬休み子どもクラブへの参加

夏休み子どもクラブ 料理講習 (08/23)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

本年度、最も手ごたえを感じた事業は外国籍児童交流会だ。本年度末に第3回を迎えた交流会は回を増すごとに子どもの数も増えてきている。さらに教育委員会人権教育課とバンデイラの会議も回数を増やし続け、交流会ごとの反省を踏まえつつ着実にレクリエーションの質は高まってきている。本年度は小学校の2学期と3学期に交流会を設定したが、来年度からはさらに1学期での交流会開催も視野に入れている。

申請時の計画では報告冊子を作る予定であったが、教育委員会との交流会や外部イベント（夏休み・冬休み子どもクラブ）においてバンデイラの活動を紹介することになった。また学内でのビラ配り等も行った。バンデイラのメンバーの減少によって報告冊子を作ることができなかったので、まずは定期的な活動内容を充実させつつ活動メンバーを増やしていきたい。

勉強会と研修会についても同様に、活動メンバーを増やした後に実施していきたい。

中央中学校での進学サポート事業については、昨年度よりもバンデイラと中央中学校間での連絡が円滑に行われた。しかしながら、メンバーの活動可能な日時と中央中学校が支援を求める日時がかみ合わなかったため、進学サポートを行うことのできた期間は限られた。

最後に、バンデイラは今年度いっぱいを以って近江楽座ではなくなる。来年度は別の形でバンデイラ・ジ・オウロの事業を展開していきたいと考えているが、この一年間で学んだこと、ひいてはこの5年間で学んだことを最大限に生かしこれからも外国籍の子どもたちの学習支援を行っていきたい。

活動を通して学んだこと

活動も 5 年目に入り、子どもの一言で自らの責任や与える影響について考えることがあった。昨年度の行事を子どもたちは覚えていてくれた。また日本語がしゃべれるようになっている子もいた。小さな子どもたちはまさに成長期で物事をどんどん吸収する。これからも子どもたちに良い刺激を与えられるようになりたいと思う。

石田みずき（環境政策・計画学科 3 回生）

今年度をもって、バンデイラ・ジ・オウロは近江楽座としての活動を終える。外国籍児童との交流を通して、国の杜撰な外国籍児童教育の実態を強く感じた一年であるとともに、地域に馴染みつつある子どもたちと触れ合うこともできた。来年度からも新たな形で外国籍の子どもたちの教育支援を行っていきたい。

高橋篤史（人間関係学科 2 回生）

外国籍児童交流会は本年度末に第 3 回を迎えた。この事業はまだ始まったばかりであり、規模も小さいものではあるが、回を重ねるごとに子どもの人数も増え、賑やかになってきており、大きなやりがいを感じる。来年度からもより質の高い交流会を企画し、子どもたちに楽しんでもらいたい。

三宮広之（機械システム工学科 2 回生）

地域からのコメント （抜粋）

滋賀県公立学校日本語指導員　平田輝子さん
（中央中学校での放課後学習支援事業における指導に参加）

外国人児童生徒の一人ひとりは、国籍と生まれた国、育った国が異なることで抱えてしまう言葉や文化の壁だけではなく、育てている両親とも来日年齢の違うきょうだいともそのありようが異なるために、とても孤独な思いをしている。バンデイラ・ジ・オウロが生まれたとき、私はそういう状況に一筋の光が差してきたように感じた。あるがままを受け入れて、体当たりで付き合ってくれるお兄さんお姉さんの存在は、かけがえのない存在となっている。サンタナ学園でのお楽しみの授業、ピケノポレガルでのサポート、中央中学校での学習支援・・・その時に見せる子どもたちの笑顔はそれを物語っている。学生の皆さんが当日までに準備したことも含めて、このように大切にされた経験は自己肯定感を育み子どもたちの成長に欠かせない力となる。この尊い活動に心から拍手を送りたい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

トントン相撲（外国籍児童交流会での企画）

指導教員より （抜粋）

人間文化学部 地域文化学科　武田俊輔

このプロジェクトは、2009 年度の環琵琶湖文化論実習で「多民族・滋賀―『在日外国人』から滋賀を見る」というテーマの3班に参加した学生が中心となって2010 年度に発足した。メンバーを補充し、今年度も継続できていることが何より嬉しい。

学生の活動に対する地域社会のニーズは、在日外国人を支援する団体や個人と交流する中で、非常に強く感じてきた。バンデイラ・ジ・オウロの活動は、まだ規模も質も小さなものではあるが、活動を継続していく中で充実していくことが重要であろう。

自分たちで主体的に活動を進める一方、計画倒れや段取りの悪さなど改善すべき点も見られた。活動先の市立中学校、保育園でも学生の活動に対する期待や信頼が高まっている分、期待に応えるためにメンバーの不足、交通手段の確保など課題は多いが、活動を継続してほしいと願っている。

15 おとくらプロジェクト

歴史ある高宮に新たな風を

築 200 年を超える古民家と蔵が、喫茶、ギャラリー、イベントスペースに生まれ変わりました。大学生が主体となって営業している活気あふれるコミュニティースペース、それが喫茶おとくらです。高宮の方々と協力して今まで以上に元気よく活動しています。

TEAM DATA

チーム名： おとくらプロジェクト
代表者： 久保晃（環境科学部）
メンバー数： 21 名
指導教員： 迫田正美、中西茂行（環境科学部）
活動場所： 彦根市高宮町、座・楽庵「おとくら」
関係団体： 高宮経友会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 **H22** **H23** **H24**

PROJECT　**実施事業**

(1) イベント活動
（白谷仁子・菅井麻友子コンサート , 中嶋俊晴コンサート ,4 周年コンサート , 高宮サマーフェスティバル , 掘り出し物市 , 絵本読み聞かせ会、クリスマスコンサートなど）
★見出し写真：コーヒー豆勉強会 (06/23)

ガラス体験 (08/11)

4 周年コンサート (09/15)

(2) ギャラリー活動

(3) 喫茶活動

(4) 広報活動

(5) 研修旅行

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は基本的な活動である喫茶運営を軸にそれぞれの班でもおとくらをより良いものにするために活動できたと思う。喫茶営業に関してはワッフルの改良、コーヒーの種類と軽食の充実など、お客さんに喜んでもらえるようなメニュー作りができた。また、「いいところですね。また来ます」と言ってくださるお客さんが増えた。メニュー・店内の改善、広報の工夫によって、少し見え始めたものを今後伸ばしていくことが課題である。

そして、イベントの数が今年度は多く、予定していたギャラリートークや不破邸コンサートなどを成功させることが出来たほか、絵本の読み聞かせ会やライブなど、幅広い年齢を対象としたイベントを企画、または依頼という形で実現できた。ギャラリーも月ごとに展示していたので、たくさんの人に利用していただけてとても賑やかな一年であった。新しいことにチャレンジできたこともメンバーにとって良い刺激になった。

課題としては、集客率をあげること、高宮の人におとくらをより身近に感じてもらえるようにしていくことが挙げられる。地域の方々のおとくらの認知度は決して高くない。学生団体が地域に受け入れられるのは簡単なことではないと感じるので、おとくらの活動と地域行事への参加を継続的に行っていくことで、地域のコミュニティスペースとしての理想像により近づいていけるのだと思う。

今年度までの活動も、地域の方や関係者の方々のサポートあってこそのものであった。来年度はおとくら5周年の年であり、これまで続けてこられた感謝の気持ちを込めて、地域に何か恩返しができるような活動を考えている。

活動を通して学んだこと

私は今年度、イベント班として、三つのイベントを担当しました。自分では、日時や時間設定、広報の期間や方法を工夫してみたつもりでしたが、なかなか思うように集客できませんでした。たくさんの集客をするためには、ただ闇雲に広報するのではなく、効果的な方法で広報することが大切だと学びました。

鈴木亜実（生活栄養学科1回生）

おとくらでは様々なイベントがおよそ月に一回のペースで行われています。その中でも今年度でとりわけ大きかったイベントは8月のサマーフェスティバルと9月のおとくらプロジェクト4周年記念コンサートです。どちらも地域との結びつきを大切にし続けたからこそ成功した企画と言えるでしょう。

岡田章寛（電子システム学科1回生）

今年は、新たに「おとくらだより」の発行を始めた。1か月ごとに、スケジュールやイベントの情報などを載せた広報紙を作成する。家主さんの協力を得て、高宮の回覧板にも回し始めた。地元の方々におとくらを知ってもらえる貴重な機会を設けられたので、今後も続けていきたい。

伊庭朱音（生活栄養学科1回生）

県外出身だが高宮の夏祭りの参加や彦根プラザのコンサートの手伝いなど地域の人と共に活動をして、その土地の一員という目線でまちを見ることができた。また喫茶活動では地域の人々の親切さや優しさに触れ土地への愛着がわいた。カフェサミットや他校の学生カフェへの訪問によって刺激を受けた。

西谷実咲（地域文化学科１回生）

地域からのコメント　（抜粋）

宿駅座・楽庵　加藤義朗さん

おとくらは、今年で四年目。本当に「継続は力なり」をしみじみ感じた一年でした。今までに増していろんな事にチャレンジしてくれました。ありがとう。サマーフェスティバルでの写真。おっちゃんもちゃっかり写りましたが、メンバーの竹市さんが一年間の留学を前にして全体写真を撮りました。みんなの輝く笑顔、これぞ「おとくら」です。このような充実感溢れる笑顔は、みなさんを成長させてくれる事でしょう。お節介なオーナーとして、これからも、高宮に新しい風が吹く事を、楽しみにしています。

指導教員より　（抜粋）

環境科学部 環境建築デザイン学科　迫田正美

今年度は本当に色々な新しいチャレンジをした一年であった。Facebook やブログの立ち上げ、「おとくらだより」の発行開始など、情報発信に力を入れたことは大きな効果が期待される。また、イベント活動は内容的にも開催回数も充実していた。特に参加者の幅が広がりつつあり、サマーフェスティバルに加えて不破邸など、活動の場所や幅を広げていく取り組みにも積極的で大きな成果であったし、新しい可能性を感じる。地域の方々や協力してくださるアーティストの方々への感謝の気持ちを大切にして、来年度は「おとくら」らしい5 周年にしてくれることを期待している。

環境科学部 非常勤講師　中西茂行

おとくらプロジェクトの活動も、年を重ねるごとにメンバーがいろんな学科から集まり、今後の活動内容に広がりが出てくることを期待しています。喫茶、ギャラリー、コンサート等々、先輩たちのやってきたことを継承するだけではなく、高宮のお祭りにも参加してくれたりしていますが、そうして地域の人たちとの繋がりをどんどん作っていってもらえれば良いと思っています。学生を可愛がってくださるオーナーの加藤さんにも感謝しています。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

ゆかた de 古民家コンサート～盆がえり～

おとくらプロジェクト四周年の歩み展

＜その他成果物＞
靴箱、チラシ置箱、ホットサンド
より快適な cyclingLIFE 広報チラシ
welcome to my art チラシ
読み聞かせ会チラシ
おとくら通信　11-2 月号
クリスマスコンサートチラシ
多賀と学生の成長記録展チラシ
おとくら、出張しますチラシ
ガラス体験講座チラシ
365 日のはなしチラシ

16 未来看護塾

心も体も生き活き健康に！

子どもや高齢者、障がいの有無に関わらず、地域の方々を対象に心も体も健康になってもらえるような活動をしています。また様々な人とのふれあいの中で、コミュニケーションや健康についての将来に必要な力を自然と身につけていきます。

TEAM DATA

チーム名： 未来看護塾
代表者： 山村智世（人間看護学部）
メンバー数： 83 名
指導教員： 伊丹君和、川端愛野、仲上恵子（人間看護学部）
活動場所： 彦根市内、宮城県南三陸町歌津地区田の浦
関係団体： 彦根市立病院、NPO 法人ぽぽハウス、城南保育園
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1) 野瀬町地蔵盆への参加

(2) ぽぽハウス「木工細工」

ぽぽハウス木工細工 (10/26)

(3) ビバシティ彦根「応援！生き活き健康生活！」

(4) 宮城県南三陸町「いきいき健康交流ひろば」
★見出し写真：田の浦イベント (10/13)

(5) 彦根市立病院小児病棟「クリスマス会」

彦根市立病院小児科病棟クリスマス会 (12/14)

(6) 「ちびっこ広場」（草津宿場祭り、彦根市立病院まつり、湖風夏祭・湖風祭）

(7) 野瀬町長寿会への参加

(8) ぽぽハウス「ぽぽハッピーまつり」、「クリスマス会」、「卒業を祝う会」

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度は、多くの1 回生が入ったことで100 人以上の大きな団体となり、イベントの準備や運営において非常にやりやすくなり、活動の幅も広がった。たとえば、田の浦でのイベント開催においてチラシ配布を行ったが、広範囲にイベント開催の広報ができ、前年度よりも多くの方が来てくださった。また、大津市の健康イベントにボランティアとして参加し、さらには彦根市立病院脳外科病棟も活動場所として加わったことで、活動場所が彦根市内、滋賀県内、そして被災地にまで幅広くなった。今年度もビバシティ彦根で「応援!生き活き健康生活!」を開催したが、1 期生含め30 人近くの卒業生が来てくださり、子どもから高齢者まで幅広い年代の方に柔軟に対応することができた。これは未来看護塾の長年の縦のつながりが強いことの表れであり、年齢の近い卒業生が来場者と健康相談などを通して触れ合う姿を見た現役生は、刺激を受け、多くのことを学べた。今後もこのような縦のつながりを生かした活動を続けていきたい。新たに始めた取り組みとして、子どもがより興味を持ちやすいもの（スライム作りや割り箸鉄砲作り）をイベントで始めた。参加する子どもたちの年齢の幅広さや発達段階に対応するために試行錯誤を重ねたことで大変好評であった。このように、対象のニーズに合わせて提供する内容を考えていくことは看護職に必要なことなので、この姿勢を忘れずにいたい。

活動を通しての課題は、メンバーによって参加状況の差が大きいことである。我々の活動はとにかく一度参加してみて、自分にとってどれだけ学びの多いものかを感じてもらうことが不可欠だ。来年度は新入生を対象とした仮所属期間のようなものを設け、一度は活動に参加してもらい、意義を感じ取ってもらってから所属するか否かを決めてもらおうと考えている。

活動を通して学んだこと

未来看護塾での活動を通して、小児や高齢者、障害児、被災者など、多くの方々と関わってきたことで、個別性を考えながら関わることの大切さを学びました。心が通じ合った時の喜びは大きなものです。このような機会を与えてくださる全ての方に感謝し、今後も精力的に活動していきたいです。

山村智世（人間看護学科 2 回生）

ボランティアと言っても、自分が学び成長できる機会になるのが未来看護塾での活動です。また地域の病院や保育園だけでなく、東北で行ったイベントなど様々な活動を通して、人の笑顔をたくさん見ることが出来ました。関わった人たちの笑顔を見ると、もっと成長して次も頑張ろうと思えます。

寺西麻衣（人間看護学科 2 回生）

未来看護塾の活動を続けられるのは、今まで築き上げた信頼関係があるからこそで、地域の方が笑顔で私達のことを迎えて下さることに繋がっていると感じています。これは、活動を継続的に行うことと繋がっていて、今後の活動を継続してもらうために後輩とも交流を深めておく必要があると感じています。

木村香那（人間看護学科 2 回生）

私は未来看護塾に入るまで、小さい子が苦手でした。保育園に行くようになって、こどもと目線を合わせて話すことを身につけることができました。また、子どもにとって遊びが重要であることを感じられました。今では、小さい子への苦手意識が無くなり、子どもたちと関わることが好きになりました。

中谷早智（人間看護学科 2 回生）

地域の方のコメント （抜粋）

特定非営利活動法人 NPO ぽぽハウス　福井久美子さん

ぽぽハウスにとっては、「未来看護塾」の学生の関わりは大変重要な役目を果たしてくれています。学生たちに支援してもらう場面では、体験活動が多く、例えば『切符を買って電車に乗って出かける』などでは、普段は車移動が主体ですので、どの子も何事も初めて尽くしで不安と緊張のプログラムです。更には障害手帳の減免を子ども達が利用しようとすると窓口で切符を買わなくてはいけません。そんな時、学生方が子どもひとり一人に寄り添ってもらい『大丈夫だよ！』オーラを出してそばで見守ってくれています。改めて私たちは、「寄り添う」ことが子どもたちにどれほど心強いか、を目のあたりにします。そして子どもの経験の達成感を共有してくれる人がいるということが子ども達を成長させてくれるエネルギーになります。また時間の経過の中で関る学生の姿にも言葉がけや仕草から相手を受入れようとする様子が見られます。子ども達が成長する姿と共に学生達も逞しくなっていく様子が見られるとともに、この学生たちの活動が地域に育つ子どもを支えてくれている役割りとして重要であると実感しています。

指導教員より （抜粋）

人間看護学部 人間看護学部　伊丹君和

未来看護塾は「近江楽座」とともに育ってきました。人間看護学部の１期生たちが立ち上げて以来、現在は10・11 期生の学生たち中心に頑張っています。地域では、高齢者さんや子育て中のお母さんたちが心と身体の健康、そして相談できる仲間を求めておられます。未来看護塾はそのような地域課題を少しでも解決できるよう、ボランティア活動を通じて模索しています。病院やNPO ぽぽハウス、保育園などでの定期的な活動はもちろんのこと、「生き活き健康支援活動」における健康チェックやハンドマッサージ、足浴の提供などを実施し、地域住民の心と身体の健康、ネットワークづくりを目ざして日々奮闘しています。ビバシティ彦根における「応援! 生き活き健康生活！」では卒業生たちの協力も得て、毎年大盛況です。また、宮城県南三陸町における活動も継続しており、学生たちは被災地の方々と笑顔と元気を交流し合っています。

DELIVERABLE　成果物／制作物

みかん通信

イベントポスター

17 政所茶レン茶゛ー

政所茶に夢見て…

私たち茶レン茶゛ー（チャレンジャー）は、茶の産地、政所（まんどころ）で茶畑を借り、現地の茶農家さんの指導を受けながら、お茶づくりを実践しています。地元の人からお茶にまつわる文化などを聞き、政所の暮らし・文化を学び伝えます。

TEAM DATA

チーム名： 政所茶レン茶゛ー
代表者： 谷田麻綾（人間文化学部）
メンバー数： 11名
指導教員： 上田洋平（全学共通教育推進機構）
活動場所： 東近江市政所町
関係団体： 東近江市役所
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　**実施事業**

(1) お茶づくり(草刈り，台刈り，整枝，茶摘み，手揉み，袋詰め，草むしり，肥料入れ)
★見出し写真：茶摘み (06/01)

袋詰め (07/07)

二番茶手揉み (07/20)

(2) 商品パッケージづくり

(3) 情報紙（政所茶レン茶゛ーナル）の発行

(4) イベント・WS

(5) 県内外イベントへの参加 (販売・PR)

(6) 研修

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）

今年度はどれも手探り状態で、大きな喜びとまた不安を抱え残したような1年間だった。滅多にすることのない農作業、初めての茶摘み、知識も経験も浅いだけに協力して頂いた周りの皆さんには大変なご迷惑と心配をおかけした。しかし、それだけに新茶が出来上がったときには喜びも大きかった。農業に土日や平日は関係なく、その時々の気温差などで良くも悪くもお茶は育っていく。茶摘みという一見華やかなお茶づくりにおいて、私たちなどまだ到底足下にも及ばないが、政所の方々の苦労をほんの少し感じることができた。地域の実情を確認する上でも良かった。

政所茶レン茶゛ーの活動は当初、まだ発足して一年も経たない頃であった。経験の浅い余所者がいきなり地域活性化と言い好き放題したところで、地元住民の方々にとっては訳の分からない状態が続くだけだ。そのため、今年度は政所茶レン茶゛ーの土台づくりとなる活動を目標とした。たくさんのご縁から多くの方々に協力して頂き、政所町内だけでなく外部からの周知を得ることができた。

ただその分、全体としての活動が流されるような若干受け身状態となりがちで、ひとつひとつしっかりと実を結べたのかが不安だ。土台づくりと言いながら、インプットよりもアウトプットに先走る傾向も多々あった。またメンバー内での活動への意識・情報の共有も難しく、仕事の分担なども上手くできなかった。

政所茶レン茶゛ーは学生だけの組織ではなく、教員はもちろん本学の卒業生や社会人メンバーなど政所やお茶に関心のある人々で構成されている。今では発足2年目に入るが、まだ土台づくりの期間は終わりそうにない。継続的に活動を続けていくためにも、チームの組織体制を見直し今後の方向性を再設定したい。

活動を通して学んだこと

一年間の活動を通して、普段から飲んでいる緑茶が日頃の雑草抜きや、整枝作業などの細かな行程を経て作り上げられることを身近に感じることができた。また同時に知らないことも多く、これからも学び続けていくことが大切だと感じた。

白木慶子（生活栄養学科２回生）

お茶作りに珍しさを感じこの団体に入った。畑作業や地域活動は初めてで、見よう見まねだが努力している。この活動には社会人メンバーも多く、卒業生や市の職員の方とのお話は貴重な経験だ。私は多くの方と交流し、教えて頂けることが嬉しい。地域の方々の期待に応えるべく、責任のある行動をしてきたい。

上西葉瑚（国際コミュニケーション学科１回生）

この活動に参加して、社会人の方と一緒に活動するという点から、社会人との関わり方を学んだ。また、地域に入って地域の中で活動するということは、自分たちだけの力で成立しているのではなく、地域の人々を始めとする多くの人の協力があるからこそ成立しているということも学べた。

出口翔太（地域文化学科１回生）

５月から６月にかけて政所でお茶づくりを通し、お茶ができる過程を学ぶことができた。そしてメンバーと協力し作業を進め、地域住民や社会人メンバー、他学科の人たちと交流ができ繋がりを築けた。また住民の方からのお話や勉強会から、政所は高齢化で後継者が不足し存続の危機であることを改めて実感した。

苗村リサ（材料科学科１回生）

地域の方のコメント

政所茶農家　白木駒治さん
（茶畑の所有者であり、私たちにお茶づくりをご指導してくださる師匠）

アメニモマケズ、カゼニモマケズ、頑張ってくれましたね。僕の拙いお茶づくりの指導をよく理解して、慣れない仕事に皆で一生懸命取り組み努力してくれたことに感謝しています。正直言っていつ挫折されるか半信半疑の時もありましたが、去年６月に君達の摘み取った新茶が出来上がった時、皆が袋の中を覗き込み驚嘆しながら嬉しさ一杯の笑顔を見せて喜んでくれた事が忘れられません。茶レン茶゛ーは、すでに政所町内どころか奥永源寺内に知れ渡り今後の活動が大いに期待されています。４年間の学生生活の中での継続は大変な事ですが、叡智を結集して有名な政所茶の存続の為に末長く皆さんの力を貸して下さい。今年も茶園が君達を待っています。

指導教員より（抜粋）

全学共通教育推進機構　上田洋平

事の発端は昨夏の「地域再生システム論」でのフィールドワークだった。当時の区長からの「今まで色々な大学から先生や学生が来てくれたが、皆いつの間にかいなくなる。継続的に関わりが切なる願いです」という言葉を真に受けて、地道に頑張っている。活動報告「茶゛ーナル」の毎月の全戸配布にしても、多くの月を戸別訪問によって配布している。これはなかなかできることではない。下手に知恵がつくともっとスマートな仕方で済ましてしまうようになるのだろうが、こういうことは辛気くさいままでよい。「茶レン爺や」との立ち話のうちに茶園が提供され、拠点の空民家までついてきた。最初から社会人メンバーがいて、共に汗をかいてくれる役場の人にも沢山に恵まれている。そのために「葛藤するチャンス」が少なかったかもしれないのは気の毒だが、プロジェクトとしては上出来であった。近隣、他府県の団体・イベントからのお声がかりも、地元の方が普通にお茶を作っていたのでは有り得ない事で、他大学との交流もできたが、これを地域の利益にどうつなげるか。当時の区長からは「まず茶の味のわかる学生を育てて欲しい」という宿題も頂いており、隊員諸君は今後は茶の栽培だけでなく、お茶を含めた地域の生活文化の会得継承振興にも取組まれたい。メンバーから当該地域が管轄の「地域おこし協力隊員」が誕生したのも追い風にせよ！

DELIVERABLE　成果物／制作物

情報紙「政所茶レン茶゛ーナ ル」

政所茶「茶レン茶゛ーの茶」

18 あかりんちゅ

リサイクルキャンドルでスローな夜を…

お寺などからいただいた廃棄ろうそくでリサイクルキャンドルを作り、キャンドルナイトやキャンドル作り教室、キャンドル販売を行い、リサイクルキャンドルを灯して過ごす「エコでスローな夜」を広めようと活動しています。

TEAM DATA

チーム名： あかりんちゅ
代表者： 白井希実（環境科学部）
メンバー数： 31 名
指導教員： 近藤隆二郎（環境科学部）
活動場所： 学内、滋賀県内
関係団体： ひこねキャンドルナイト実行委員会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 **H21** **H22** **H23** **H24**

PROJECT　**実施事業**

(1) キャンドル作り教室 in ラリルレトロカフェ

(2) びわこワークスさんキャンドル作り技術提供

(3) 夏湖風キャンドルナイト

(4) サマーキャンドル販売

(5) 香取神社キャンドルナイト

(6) ソロプチミストさんキャンドル作り技術提供

(7) ミツマルシェ キャンドル作り教室&ナイト

(8) ひこねキャンドルナイト

(9) 湖風祭キャンドルナイト

(10) 能登川南小100周年記念キャンドルナイト
★見出し写真：能登川キャンドルナイト (11/23)

能登川キャンドルナイト (11/23)

(11) 近江楽座説明会キャンドルナイト

(12) あかりんちゅ OG 会

(13) キャンドル作り教室 in かみおかべ

(14) 委託販売

(15) 残蝋回収

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の1 番の成果は、あかりんちゅの活動の中で今までに経験のない、最大規模のイベント、能登川南小学校創立100周年記念での1万個のキャンドルナイトを成功させたことである。大規模なキャンドルナイトを行う上でのスケジューリング、人員の確保、計画的な準備、当日の役割分担、安全面への配慮、企画料の設定、キャンドル配置のデザイン作成、キャンドルを並べる手順など様々なノウハウを獲得できた。メンバー全員で話し合い、協力し、連携して作業を進め、チームワークが高まった。すべてのキャンドルに火を灯せた瞬間は、共に達成感と感動を味わうことができ、メンバー自身も「エコでスローな夜」を過ごせた。また1500 人を超える人が見に来られ、喜んでもらえたことはなにより嬉しく感じた。

今年度は、あかりんちゅの運営をメンバー全員でやれた。新メンバーが増え、ほとんどの学部学科の学生が揃う団体となった。メンバーが増えたことにより、みんなで準備・参加したり、モチベーションを維持することが難しいように感じられたが、昨年仕上がったチームの活動の基盤の役割分担に沿って、ひとりひとり役割を持ち責任を持って動くことで、モチベーションの維持とチームワーク形成につなげることができた。あかりんちゅの活動のリズムができてきたように感じる。また、メンバーが増えたことで1 年間に多くのイベントをすることが可能となり、難しい曲のハンドベル演奏や大規模なキャンドルナイトへの挑戦ができた。この1 年で、更なる活動の可能性が広がったと思う。反省点として、活動拠点場所が見つけられていないこと、商品キャンドルの製造・販売が昨年度よりも減ってしまったことが挙げられるが、その分キャンドルナイトやキャンドル作り教室などのイベントに力を入れてきた。拠点探しは今後の課題とし、その解決とともに、あかりんちゅの発展につなげていきたいと思う。

活動を通して学んだこと

この1年間の活動を通して、あかりんちゅの活動がいかに多くの人々の協力により支えられているかを学んだ。能登川南小100周年記念という大きなイベントを始め、様々な活動に参加し、残蝋を提供してくれる方、イベントの協力をしてくれる関係団体、ボランティアの方々など多くの人との繋がりを感じた。

吉田佳央里（国際コミュニケーション学科2回生）

エトコロでのキャンドル作り教室や能登川南小学校キャンドルナイトで地域の小学生や保護者の方々とお話しすることによって、人とのかかわりの大切さや温かさを知ることができました。また、キャンドルナイトを実施する中で、ほう・れん・そうの大切さやいざというときの臨機応変さを学びました。

永井見奈（環境政策・計画学科2回生）

能登川キャンドルナイトに会議段階から参加させて頂き、キャンドルの製造、配置、点灯といった作業とは違った、デザイン案の作成やスケジューリングの難しさを学びました。小学校関係者の方など、普段は関わる機会のない方々と関わる機会があり、学生の中だけでは学べないことを学ばせて頂きました。

税所七海（生活デザイン学科2回生）

私は活動を通して、地域の方々との交流、またチームワークの大切さについて学ぶことができました。一人ひとりに与えられた役割を果たし、一つの大きなイベントをやり遂げることで、達成感や感動を味わい、またそのイベントによって地域を活性化させる、そんな活動ができたのではないかと思います。

徳永菜加（生活デザイン学科2回生）

地域の方のコメント

夢京橋あかり館　薮田清さん
（キャンドルナイト事業共催者）

責任ある仕事を達成した喜びと自信は何ものにも代えがたい財産になったと思います。本年は能登川南小学校創立100周年記念のビックイベントキャンドルナイトの成功と、ひこねキャンドルナイト実行委員会の会議でのイベント提案から配置設計まで運営全般を淡々とこなして頂きました。お陰様で年々お客様も増え本年のキャンドルナイトは最高の人出となり知名度が大いに高まりました。これからも共にイベントを開催する大きな意味を理解していただき、常に真剣な取り組みと、最善でなくとも懸命な行動力、ディスカウントしない行動は、次のステップに向かう時必ず生きてきます。イベント終了後は成果の検証を繰り返し行ってください。より多くのお客様に感動を与えられる事業に育っていく事を願っております。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 環境政策・計画学科　近藤隆二郎

5年目を迎えて、代表も5代目となり、パワーアップが伺える。参加学生が学部学科を越えて多様性をもっていることは特筆すべきである。新入生が途切れずに入ってきており、継続性としても高く評価できよう。

継続性で重要なことは、一年間の活動がある程度、基礎的なルーチン的活動と、チャレンジ的な活動とに分かれていることではないだろうか。まずは、ルーチン的な活動を引き継ぐことで、事業に参加できる。大人数のメンバーにそれぞれの役割をふることができる。恒常的な活動をする中で、灯りの素晴らしさに気づき体験し、新しいことにチャレンジする余裕が生まれてきているのかもしれない。外部からの委託や依頼も多くなってきている中で、是非取り組んで欲しい課題もある。まずは、キャンドルの雨風対策である。キャンドルナイトイベントを依頼するときの最大の課題は、雨風による中止である。たとえば、雨はともかく、風についてはフードを自作してみるといったことも重要であり、試行を始めることがのぞまれる。

また、そろそろ、長期ビジョンを考えてみても良いのではと思っている。各地のキャンドルナイトへのグリーンキャンドルの転換斡旋や啓発、オリジナルキャンドルの販売は、もう少し継続的に取り組んでも良いのではと思う。また、OGらによる会社的部門の設立など事務局体制の強化が必要な面も出てきている。

DELIVERABLE　成果物／制作物

リサイクルキャンドルの販売

ひこねキャンドルナイト

19 能登川商店街とのコラボレーション企画による地域活性化

レトロカフェで能登川を魅力的に！

懐かしい雰囲気漂う能登川商店街に立地する古民家にてカフェ“ラリルレトロ”を運営しています。店内は昭和レトロをモチーフに、くつろいでもらえる場所づくりをしています。今年のテーマは「商店街カフェ」。より地域とつながれるカフェを目指します。

TEAM DATA

チーム名： 能魅会
代表者： 生田遥（環境科学部）
メンバー数： 10名
指導教員： 近藤隆二郎（環境科学部）
活動場所： 東近江市能登川町
関係団体： NPO法人エトコロ
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 **H24**

PROJECT　実施事業

(1) カフェコラボ企画
（めがね21さんと，やおとさんと，左近茶舗さんと，アトリエオクハシさんと，イチキフルーツさんと，中島酒店と，左近茶舗さんと）

(2) 感謝祭

(3) のとがわ子どもアワー参加
★見出し写真：こども寄席 (07/07)

駄菓子屋営業の様子 (07/07)

(4) 神戸松陰女子大との交流

(5) あかりんちゅワークショップ

あかりんちゅワークショップ (06/08)

1年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

私たちがこれまで目指してきたものは、「昔懐かしのあの味」です。閑静な商店街にたたずむ古民家で、昭和の歌謡曲を聞きながら、あの頃通ったあの店をお客様の心に思い出してもらいたいと思っていました。今年度から、ナポリタン、厚焼きたまごサンド、プリンアラモードなどを定番メニューとして掲げ、末永く愛されるように願いました。しかし一旦知っていただいた味を、もう一度また食べたいと思って足を運んでもらうには、何か足りない気がしていました。そこで生まれたのが、商店街コラボ企画です。月ごとに商店街のあらゆる店舗との合同カフェを企画し、月替わりに限定メニューを考案しました。月ごとに協力してくださる店舗を募り、能登川の美味しい食材を使わせていただきました。商店街の方々とこれまで以上に関わることができました。店舗の方たちとだけでなく、来店してくださるお客様も、「こちらの食材は○○さんのものを使わせていただいております」「この衣装は○○さんからお借りしていて」というと、大変興味を持ってくださいました。コラボ企画が進むにつれ、来店する常連さんたちが言ってくださるようになりました。「今月はなにかな？」協力してくださったお店の方々は皆さん本当にあたたかくて、地元のおいしい食材をたくさん教えてくださいました。地域の方々に、地域の美味しいものを提供するのは少し緊張しましたが、みなさんいつもきれいに完食してくださる度に感動しました。

私たちはここでカフェができた経験を本当に誇りに思っています。ラリルレトロの立ち上げから三年がたちました。当初のカフェを軸に、そして子どもを軸に展開し、この最後の一年で、目指していた地域と関わるコラボレーション企画にも挑戦することができて本当によかったです。私たちがここで三年間も活動を続けることができた背景には、たくさんの先輩の努力や、たくさんの地域の方々の支えがあったからです。だからこそ、終わりを迎えるにあたって、私たちに関わってくださったすべての皆様に感謝が伝わるよう締めくくりたいと思っています。

活動を通して学んだこと

能登川の商店街にゆかりあるお店とコラボさせていただくことで、もともと能登川にすむ方々にとっても、その良さをより知ってもらえる場をラリルレトロで提供することができたのではないかと思います。スタッフも、地域の方々との交流の中で新しい発見があって楽しかったです。

北村優子（人間関係学科1回生）

私自身がこの活動に加わって 2 年目となりました。能登川の方々から、「前から続けてくれているね。」と声をかけていただく機会が多くなり、継続することの大切さ・難しさがわかった年のように思いました。また、毎月の集客数の変化から、広報活動の重要性を身に染みて感じた一年にもなりました。

笛吹真紀（地域文化学科 2 回生）

カフェ誕生から 3 年。私が活動に関わったとき、既にカフェは先輩たちで動いていて、それに習ってきました。今、自分たちが活動をひっぱる立場に立って、立ち上げ当初の目標を、正確に引き継げているのか不安でした。その不安に打ち勝つためにも、仲間と必死に努力することを学びました。

岡浅里砂（人間関係学科 2 回生）

地域の方のコメント（抜粋）

ＮＰＯ法人エトコロ施設管理人　森本浩嗣さん

駅前商店街の活性化には、若い人たちの力が必要だと思います。学生の活動は商店街とここで生活をする人たちにとって、とても良い刺激になったと思います。本年度のレトロカフェは、毎回、商店街の各店舗をとり上げ、その店舗をテーマにしたカフェメニューの企画はとてもよかったです。そして学生達が毎回、商店街の店舗にかかわりを持ちながらアイデアを練っている姿は、私自身とこの商店街の関わり方についても考えさせられました。しかし学生の方々は忙しかったのか、毎回のカフェのアイデアを練るのに時間がかかったのか、チラシ配布など宣伝をするのが遅くなり、それが集客にひびいていた日もあり、今から思うととても残念です。今後、各方面で活躍される学生の方々に、能登川でカフェを開いた貴重な体験を生かして頑張っていって欲しいと思います。

指導教員より（抜粋）

環境科学部 環境政策・計画学科　近藤隆二郎

ラリルレトロカフェは、3 年目で閉店を迎えることとなりました。終了をマイナスに捉えるのではなく、継続だけが目的にならないようにとは常日頃から感じているところです。立ち上げから3 年目にもなると、引継ぎの中で当初のエネルギーを抱き続けるのが難しい面もあり、とはいえ逆に地域側にはようやく馴染んできた頃で、そのギャップが大きくなる時期かもしれません。ランチなど含めた本格的なカフェの運営は、月一と言えどもかなり学生活動としては難しく、よく3 年間も続いたなというのも正直な感想です。今年は、特に商店街の個店とコラボしたメニューづくりなどは、やっと具体的な関係性が商店街と出てきて面白いぞと思っていたところでした。学生カフェを通じて個店を紹介していくという方法は、ひとつの興味深い取り組みであったと思います。また、私から見ると、組織運営が難しそうだなと思います。誰がリーダーなのか、地域側の窓口なのか、責任をとるのか、そういったことがはっきり決められずに事業に突入してしまっているのではないでしょうか。これは地域側にはとても困ることで、一体誰に伝えたら良いのかがわからなくなります。分担と責任を明確にすることでこそ、それぞれが成長すると思っています。

何はともあれ、三年間お疲れさまでした。商店街に子どもをつないでくれたこと、また若い層を引き寄せてくれたことは評価できます。同時に、学生力の限界もある意味で示したことは大事な点だと思います。

DELIVERABLE　**成果物／制作物**

喫茶ラリルレトロチラシ

限定ランチ「目にも美味しい」ご飯
（めがね 21 さんとコラボ企画）

20 とよさと快蔵プロジェクト

空き家のこれからを考える

近江商人のまち豊郷町には空き家となった民家や蔵が点在しています。こうした町の資産に着目して、学生なりの発想で活用したり、町を盛り上げる人達をサポートする立場をとったりしながら、地域を盛り上げる活動を行っています。

TEAM DATA

チーム名： とよさと快蔵プロジェクト
代表者： 林操輝（環境科学部）
メンバー数： 33 名
指導教員： 迫田正美（環境科学部）
活動場所： 犬上郡豊郷町
関係団体： NPO 法人とよさとまちづくり委員会
近江楽座活動年度： H16 H17 H18 H19 H20 H21 H22 H23 H24

PROJECT　実施事業

(1) ミツマルシェ

(2) タルタルーガビアガーデン

(3) レトロ市 , とっと祭り

とっと祭り (08/03)

(4) 定例会

(5) 満ち家改修（庭整備 , 改修）

満ち家黒板づくり (10/06)

(6) 村岸邸改修（実測 , 庭掃除 , 物品整理 , 模型づくり , デッキづくり）
★見出し写真：村岸邸デッキづくり (03/16)

(7) 研修旅行

(8) 田舎暮らし体験イベント

(9) 他団体協力イベント

1 年の活動まとめ・考察（成果と課題）（抜粋）

今年度の活動の一番の成果は町のとのつながりを再構成できたところにあると考える。とよさと快蔵プロジェクトが発足して10年、改修させてもらった古民家が10 件と活動の幅も広がる中で、ただ物件の改修をしていくにも限界があると考え、今年は今までの物件、特にシェアハウスの入居者を増やすことで、その費用を活動資金に還元できるようなシステムを作ろうと試みた。その成果もあり来年度からはシェアハウス全物件に学生が住まうことが出来るようになり、もともとのコンセプトでもあるシェアハウスから生まれた資金を活動に還元させることも再来年から可能になってくる。また、その中で、町の方（代表してNPO 法人とよさとまちづくり委員会）の方々と話し合う機会も増え、今後の方針を話合えるきっかけともなり、より町との関わりが深まった一年となった。

その背景には、豊郷町のイベントに積極的に参加することや、町に対してイベントを開催してより多くの町の人に快蔵の活動を知って貰う機会を増やしたこと、学内コンペや提案を町に積極的に行うことで、町の方からも様々な意見を頂くこともできたことも要因となっている。

また、1 回生22 名、2 回生10 名と来年度も主力で活動してくれる学生が多く、この流れを引き継いだ上での新たな活動のビジョンも話し合うことができ、11 年目の再出発として良い一年になった。

今後の課題は、物件を改修していくだけの団体ではなくなったことを認識し、その上で何を提案でき活動するかが鍵になってくるので、一つひとつの活動を町の人を含め全体で考えていく必要がある。しかし、スローペースになることは禁物なので、短い時間の中で深い議論を行い、実践する能力を身に着けていくことが重要である。

活動を通して学んだこと

今年度大きく変わったのは、自分の立場だ。下を動かさないといけなくなったのと同時に任される仕事も増え、悩み、逃げてしまいたいこともあった。しかし、町の人とも去年より打ち解け、自分自身の視野も広がったと感じられた1年だった。来年度は、人数もいるので体制をしっかりし、指示をしっかり出していけるようにしたい。

成瀬洋子（環境建築デザイン学科 2 回生）

チームの一員としてこの一年活動してきて思うことは、学生の自分達が想像以上に豊郷という町に関われているのではないかということである。学生という身分でも町の活性化のためにできることがたくさんあることを実感した。そしてこれからも学生だからできること、豊郷だからできることを探求していきたいと思う。

安井大輝（環境建築デザイン学科 1 回生）

今年度は、まちの方々と様々な出会いや関わりが持てた。タルタルーガでの活動も思い出深く、豊郷の方同士でも新しい繋がりが生まれるきっかけになれた。イベントの企画や運営も経験でき、チームで動くことの可能性や難しさを学んだ。まちの協力体制も強まりつつあり、現状を見直し、環境を最大限に活かしていきたい。

吉田瑛里奈（環境建築デザイン学科 2 回生）

地域の方のコメント

NPO 法人とよさとまちづくり委員会　北川稔彦さん

とよさと快蔵プロジェクトの豊郷での活動をありがたく思っています。その時間をアルバイトに当てれば、小遣いにもなりますが、豊郷の地域の活動に当ててくれていると言うことは、学生にとってもそれなりの魅力を感じてもらっているのかな?とも思います。

経験も少なく、仕事ではない分、作業内容に物足りなさを感じることもありますが、豊郷の地域に来て一緒に作業をしたり、話しをする中で刺激を受けたり、また改めて再発見をさせてもらったりする部分もあります。お互いに、楽しく活動を続けていけたらなと、思っています。

指導教員より

環境科学部 環境建築デザイン学科　迫田正美

イベントスペースとしての旧前田邸(「満ち家」)の活用を進め、「ミツマルシェ」などのイベントに他の楽座チームの参加も含め、ゲストや一般の参加者を募集することで、「満ち家」の存在アピールとイベントスペースとしての可能性を知ってもらえたことは大きな成果であった。1、2回生を中心に企画・運営・実行を進めるやり方も定着しつつあり、以前からの課題であった活動マニュアル作りにも取り組み始めたことは、地域との連携や信頼を深めるためにも有意義であろう。今後は企画・運営の面での日程調整や広報活動のあり方など、さらに工夫をしてもらいたい。

来年度はシャアハウスへの入居者も増える。イベントスペースの利用者の開拓を図るなど、活動の自立性確立に向けたプロジェクトのあり方を更に探求して欲しい。

DELIVERABLE　成果物／制作物

ミツマルシェポスター

ビアガーデンチラシ

満ち家デッキ

< その他成果物 >
村岸邸デッキ
とよポロ（ポロシャツ）

2-2 『らくざしんぶん』

チームの1年の活動をまとめた活動報告新聞です。共通トピックである①「**チームのビッグニュース**」②「**プロジェクト紹介**」③「**プロジェクト自慢**」④「**地域の声**」⑤「**成果と課題**」を中心に記事を作成しています。

近江楽座ホームページに、カラー版の PDF ファイルを掲載しています。ぜひご覧ください。

近江楽座 HP：**http://ohmirakuza.net/**

01 内湖における侵略的外来種駆除

02 ART FORUM 2013 DIG'S

03 男鬼楽座

04 信･楽･人 -shigaraki field gallery project-

05 かみおかべ古民家活用計画 ― SLEEPING BEAUTY ―

06 とよさらだプロジェクト

07 ＳＴ交流推進プロジェクト

08 地域博物館プロジェクト

09 木興プロジェクト

10 Taga-Town-Project

11 障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト

12 三階蔵覚醒プロジェクト

13 たけとも　―竹の会所・友の会―

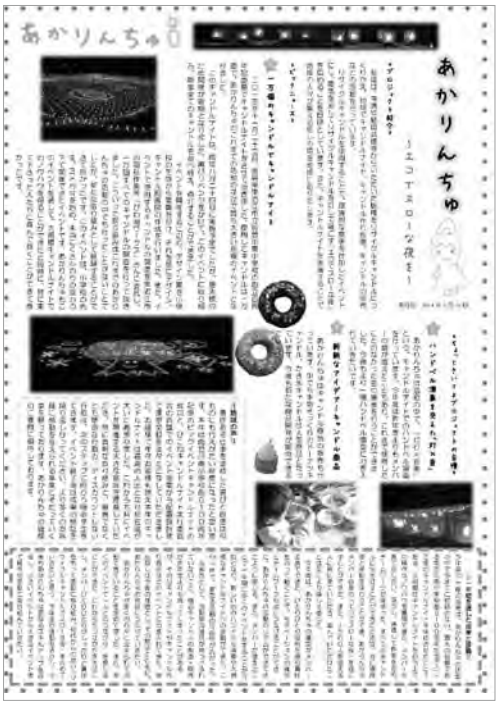
14 チーム・バンデイラ・ジ・オウロ

15 おとくらプロジェクト

16 未来看護塾

17 政所茶レン茶ー

18 あかりんちゅ



19 能登川商店街とのコラボレーション企画による地域活性化

20 とよさと快蔵プロジェクト

3 共通プログラムの報告

3-1 中間報告会「伝えよう！ 活動のあし あと 展」

日　時：10月22日（火）～25日（金）
　　18：10 ～ 19：30
会　場：交流センター 研修室①②③
参加者総数：180名（学生・教員）

2013年度の中間報告会は、以下の点を目的として開催しました。

1. 活動の振り返り、記録

チームが前半に行った活動を事業ごとにきちんとまとめることで、活動を客観的に振り返るとともに、活動を継続していく上で重要な「活動記録」をチームに残していく。

2. 活動の過程・ノウハウを後輩に伝える。共有する。

それぞれの世代やフィールドでメンバーが得た「学び」は、チームにとって、近江楽座にとっても、とても大きな財産といえる。

しかし、このような個人の「学び」は、意識しないと伝わることなく途絶えてしまいがちであり、現在一緒に活動している後輩や、これから活動に加わる後輩のために、それらのものを形にして伝えることが重要である。同時に色々なチームの学びを共有して、後半の活動がより充実したものになっていくことを目指す。

＜プログラム＞

1. 各チームからの活動報告（1チーム5分,計30分）
2.「活動記録シート」への コメント（約30分）
3. コメント共有、アンケート記入（約30分）

＜中間報告会 日程、グループ分け＞

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4
日時	10月22日（火） 18：10 ～	10月23日（水） 18：10 ～	10月24日（木） 18：10 ～	10月25日（金） 18：10 ～
会場	交流センター 研修室 1,2,3			
参加チーム	信・楽・人	滋賀県大 BASSER'S	男鬼楽座	おとくらプロジェクト
	かみおかべ古民家活用計画	DIG'S	三階蔵部	未来看護塾
	田の浦ファンクラブ学生サポートチーム	とよさらだ	バンデイラ・ジ・オウロ	Taga-Town-Project
	スチューデント・キュレイターズ	ボランティアサークル Harmony	とよさと快蔵プロジェクト	たけとも
	木興プロジェクト	政所茶レン茶゛ー	能魅会	あかりんちゅ

第1部　各チームからの活動報告

各プロジェクトチーム前半の活動をまとめ、発表してもらいました。「活動成果」以外にも「計画・準備段階」での反省点や工夫などについて発表してもらいました。1チーム5分という短い発表時間でしたが、どのチームの報告もよくまとめられていました。

期間中、研修室にて各チームの発表内容をまとめた「活動記録シート」を展示

第2部　「活動記録シート」へのコメント

会場には、各チームの発表内容をまとめた「活動記録シート」を展示し、報告発表後、参加者に各展示パネルに付箋を貼り足していく方法で、それぞれの活動に対するコメントを書き出していってもらいました。付箋は色ごとに用途を使い分けました。
黄色＝質問、ピンク＝共感、緑＝その他（アドバイス等）。

第1部　チームからの活動報告

第3部　共有

学生による司会進行のもと、付箋に書かれた内容を参加者全員で「共有」しました。会場やチームから質問や返答をしてもらい、1チームずつ回っていきました。

まとめ

発表を聞いている学生たちの真剣なまなざしが印象的でした。事前に配布したチームのレジュメを片手に熱心にメモをとっている人もいました。個々に活動していると、ほかのチームはどんな活動をしているか、活動をする中でどういったことに成長を感じていて、どんな悩みを感じているのか、など共有する機会も少ないので、特に初めて中間

発表は、活動の"結果"についてだけでなく、"計画"や"準備段階"での反省点やコツなどを意識して伝えてもらいました

報告会に参加されたチームメンバーの学生にとっては刺激になったのではないかと思います。第三部では各グループごとにの雰囲気が違って 興味深かったです。

　地域に出て活動している仲間同士、聞いておきたいこともたくさんあります。質問が多い時には、白熱した雰囲気になることもありました。報告会が終了しても自ら、各チームに再度話を聞きに行く熱心な学生の姿もみられました。

第２部　付箋にコメントを書き出し

第３部　付箋に書かれた内容を参加者で共有

「活動記録シート」に付箋を貼りだす

１チームずつ付箋を見ながら質問と回答をして回る
進行は回答とは別のチームが交代で行う

3-2 近江楽士 (地域学) 副専攻

本学の特徴を活用して、コミュニケーション力、行動力、問題解決力を高める全学共通の地域教育制度として近江楽士（地域学）副専攻が設置されて3年目となり、近江楽座と連携して、次の正規科目を実施しました。

| 地域実践学実習Ⅰ、Ⅱ

近江楽座を体験し（楽座インターン）、地域活動の実践について現場で学ぶとともに、地域活動の実践に必要な企画、マネジメント、情報発信などのスキルを修得する。楽座インターンにおいては、プロジェクトの長所および課題等の分析を行い、自ら地域貢献プロジェクトの企画立案が行えるようになることを目的としています。

＜授業実施状況＞

● 地域実践学実習Ⅰ（履修者 16 名）

▽4 月 9 日（火）6 限（A2-201）オリエンテーション

▽4 月 13 日（土） 8:45~16:40（A3-301）
地域実践活動事例分析 1-5
近江楽座成果報告会を聴講し、レポートを作成

▽5 月 19 日（日）（A3-301） 地域実践手法 1-4
9:00~13:00　近江楽座公開プレゼンテーションを聴講し、レポートを作成
13:10~14:40　インターンガイダンス

▽6月1日（土）~9月26日（木） 楽座インターン 1-4
2 つ以上のプロジェクトに参加すること。
インターン先のチームと各自日程等の調整。
◇ 活動証明カードの記録(活動参加毎）と活動担当者の確認
◇ 活動報告の提出（ポータルサイトにて）
（楽座チームのメンバーになっている学生は楽座での活動をインターン体験に読み替え）

▽9 月 27 日（金） 13:10~16:20
（交流センター研修室 1 ～ 3）　地域実践手法 5
インターン活動報告と意見交換

● 地域実践学実習Ⅱ（履修者 16 名）

▽10 月 4 日（金）11:00~11:30,12:30~13:00,
7日（月）12:30~13:00 のいずれか （4 日：地域共生センター、7 日：A2-201） オリエンテーション

▽9月30日(月)～2 月 28 日（ 金 ）
楽 座 インターン 1-4
2 つ以上のプロジェクトに参加すること。
インターン先のチームと各自、日程等の調整。
◇ 活動証明カードの記録(活動参加毎）と活動担当者の確認
◇ 活動報告の提出（ポータルサイトにて）
（楽座チームのメンバーになっている学生は楽座での活動をインターン体験に読み替え）

▽10月22日(火)～25日(金) 6 限
（交流センター・研修室 1～ 3） 地域実践活動事例分析 1 ～ 2　近江楽座中間報告会「伝えよう！活動のあしあと 展」4 回のうち2回以上に参加し、レポートを作成

▽12 月 14 日（土） 13:00 ～ 16:50
地域実践活動事例分析 3-5
環びわ湖大学地域交流フェスタ（龍谷大学瀬田キャンパス）を聴講し、レポート作成

▽2 月 1 日（土） 13:10 ～ 18:00
（地域共生センター2階会議室）地域実践手法2-5
インターン活動報告と意見交換、企画書作成のノウハウに関する講義・ワークショップ

地元学入門

近江楽座担当教員によるオムニバス形式で、「近江楽座」の実施プロジェクトを題材にして、学生力を生かした地域貢献活動に学ぶ授業を実施しました。プロジェクトの学生メンバーがゲストスピーカーとして活動報告を行いました。

▽10月28日(月)　近江楽座事務局
▽11月5日(火)　Taga-Town-Project、おとくらプロジェクト
とよさと快蔵プロジェクト
▽11月18日(月)　滋賀県大BASSER'S、ＤＩＧ'Ｓ
▽11月25日(月)　政所茶レン茶゛ー、とよさらだ
▽12月2日(月)　あかりんちゅ、能魅会
▽12月9日(月)　ボランティアサークルHarmony、バンデイラ・ジ・オウロ
▽12月16日(月)　スチューデント・キュレイターズ、かみおかべ古民家活用計画
▽12月25日(水)　男鬼楽座、三階蔵部
▽1月6日(月)　未来看護塾
▽1月20日(月)　木興プロジェクト、たけとも
▽1月27日(月)　田の浦ファンクラブ学生サポートチーム
▽2月3日(木)　信・楽・人

事務局スタッフによる講義の様子

3-3 活動報告会 “まちづくり　farmers' festa －まちをたがやす人たちの感謝祭－”

日　時：2014年4月19日（土）9:00~16:20
会　場：講義室 A3-301

2013年度の近江楽座採択プロジェクトの活動報告会を二部構成で行いました。第二部では近江楽座 10周年を記念して、学生たちが実施した［近江楽座 10周年記念イベント］の報告とミニシンポジウムを開催しました。

＜プログラム＞

1. 挨拶・プログラム説明 (9:00~9:10)
2. 第一部：活動発表 (9:10~14:30)
3. 第二部：ミニシンポジウム (14:40~16:10)
4. 全体総括（16:10-16:20）

第一部　活動発表

全20プロジェクトの活動内容に応じて【子ども・教育・発信】【地域資源活用】【交流・拠点・被災地支援】【地域協働】の4つのパートに分け、各チームの持ち時間12分（発表7分＋質疑・コメント5分）にて発表を行い、学外から2人のゲストをお呼びして、活動を客観的に評価をして頂きました。

＜活動助言者＞

○ 膽吹憲吾さん
（米原市社会福祉協議会 ソーシャルワーカー）
○ 竹岡寛文さん（フリーランサー）

会場からも発表チームへの質問や意見、そして地域関係者の方からの期待の声等のコメントもいただき、今後の活動の発展へと繋がる有意義な時間がもてました。

＜活動報告会　グループ分け＞（各チーム12分ずつ）

パート1 子ども・教育・発信 (9:10 ～ 10:10)	パート2 地域資源活用 (10:20 ～ 11:20)	パート3 交流・拠点・被災地支援 (11:30 ～ 12:30)	パート4 地域協働 (13:30 ～ 14:30)
滋賀県大 BASSER'S	男鬼楽座	かみおかべ古民家活用計画	信・楽・人 -shigaraki field gallery project-
DIG'S	とよさらだ	田の浦ファンクラブ 学生サポートチーム	Taga-Town-Project
ボランティアサークル Harmony	スチューデント・キュレイターズ	木興プロジェクト	政所茶レン茶 " ー
バンディラ・ジ・オウロ	三階蔵部	たけとも	能魅会（のみかい）
あかりんちゅ	おとくらプロジェクト	未来看護塾	とよさと快蔵プロジェクト

パート毎のチーム活動発表の様子

助言者（左から竹岡さん、膽吹さん）

第二部　ミニシンポジウム
ー［10 周年記念イベント］報告と これからの近江楽座を考えるー

第二部は、会場をA7 棟自習室へと移し、司会進行は学生委員会が行いました。2014 年の2 月に近江楽座学生員会・有志メンバーが中心となって実施した『近江楽座10 周年記念イベント』の報告を行った後、“これからの近江楽座を考えるミニシンポジウム”と題し、参加者全体で語り合う場をもちました。

報告では、企画の1 つ「楽座紡ぎのワークショップ」で作成した成果物を提示しながら、この機会に得られた学びや共有したことを発表し、その後会場とのディスカッションを行いました。第一部よりも、全体的にアットホームな雰囲気で進行しました。

ミニシンポジウムにてディスカッションの様子

この場に参加してくださった地域関係者の方の中には、ご自身の学生時代に地域の方々にお世話になった経験があり、その時の恩返しだと思って学生達と関わっている、という方がおられて”教えることばかりでなく、学生から学ぶこともあるのでお互いのもつ知識をもっと共有していきたいと思っている”、と話されていました。

高知県立大学「立志社中」の学生の皆さんから活動紹介

また、今回の活動報告会には、高知県立大学から『立志社中』で近江楽座と同じく地域に出て活動されている学生の皆様と先生方がお越しくださいました。昨年の「立志社中」中間報告会に先進事例として、近江楽座の学生をご招待いただいたのがきっかけで、その後も交流が続いています。

第一部の報告会では、立志社中の学生の皆さんからも、活動紹介等の発表をしていただきました。近江楽座の学生にとっても、高知県という異なるフィールドで同じく「地域貢献」をテーマとして活動する皆さんと出会え、とても刺激になりました。今後も、高知県立大学と本学学生が互いに成長し合えるような交流が続いていくことを願います。

活動成果展示会

日　時：2014 年 4 月 19 日（土）~25 日（金）
9:00~16:30
会　場：滋賀県立大学 交流センターホワイエ

2013 年度の近江楽座チームが作成した印刷物や刊行物などの“成果物”、“活動報告新聞”、事業報告、“10 周年記念イベント”で作成した全ワークショップボードを交流センターホワイエにて展示しました。

男鬼楽座の展示
茅葺屋根で実際に使用する茅葺きを展示

4 学生有志活動

4-1 近江楽座 合同説明会

“近江楽座や近江楽座チームを県大生に知ってもらおう！”、“活動に興味を持ってもらおう！”という目的から、近江楽座学生委員会の呼びかけにより、12の有志チームによる近江楽座説明会が開催されました。また、入学式後の「クラブ紹介」に有志チームが参加しました。

学生委員会とは

近江楽座をさらに推進していくために、チーム間の交流・連携を目的として発足した有志学生による組織です。2006年に、当時のプロジェクトチームの代表経験者が中心となり結成されました。学部・学科・プロジェクトの枠を超えて活動の輪を広げ、地域活性化に貢献するためのネットワーク形成を目指し、学生ならではの視点で近江楽座をサポートしています。

クラブ紹介 参加

日　時：2013年4月4日（木）入学式後
会　場：センター広場

湖風祭実行委員会主催の「クラブ紹介」は入学式後の新入生を勧誘するイベントです。楽座からは有志6チームが参加しブースを出展。出来たてのパンフレットを配り、新入生に声をかけました。

＜参加チーム＞
・滋賀県大 BASSER'S
・おとくらプロジェクト
・かみおかべ古民家活用計画
・とよさらだ
・あかりんちゅ
・DIG'S

「クラブ紹介」では有志6チームがブースを出展

近江楽座合同説明会

日　時：5月1日（水）16:30~19:00
会　場：滋賀県立大学交流センター

開催内容：
○ ブース相談会
○ 近江楽座の紹介ムービー上映、活動紹介発表
○ あかりんちゅキャンドルナイト 同時開催
○ 2012年度の全チーム活動報告新聞の展示

有志12チームがブースを出し、新入生や在学生に、活動の説明をしました。

＜参加チーム＞
・とよさと快蔵プロジェクト
・政所茶レン茶〃ー
・バンデイラ・ジ・オウロ
・信・楽・人
・能魅会
・Taga-Town-Project
・DIG`S
・あかりんちゅ
・とよさらだ
・ボランティアサークル Harmony
・かみおかべ古民家活用計画
・おとくらプロジェクト

今年度も興味関心を示す学生は多く、賑わいました

近江楽座にまだ所属していない学生たちから疑問や質問などが飛び交う中、実際に活動してきた学生たちは自身の活動経験をいかして丁寧に答えていました。授業終わりの学生が沢山足を運んでくれ、終始賑やかな雰囲気の時間が流れていました。説明会当日に新規メンバーが加入したチームもありました。

成果物やパソコン等で写真を見せながら、
プロジェクト内容を説明

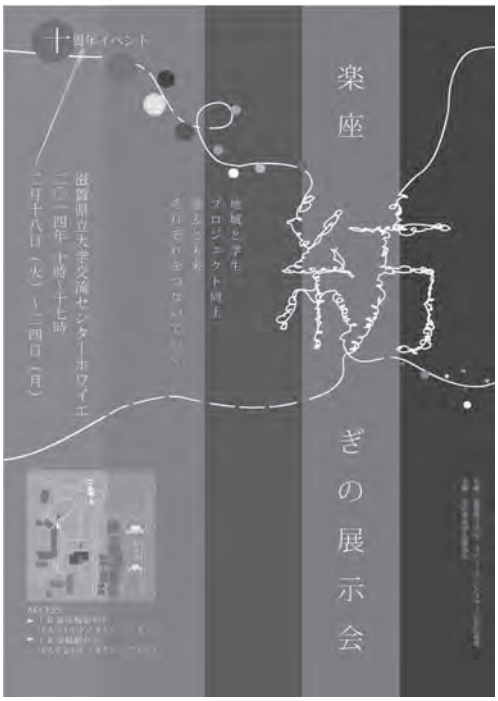
近江楽座学生委員会の久保くんによる司会進行のもと
プロジェクターを使用し、各チームが活動発表

あかりんちゅのキャンドルナイト

4-2 近江楽座10周年記念イベント

「楽座紡ぎの展示会」

日　時：2 月 18 日（火）～24 日（月）
　　10:00 ～ 17:00
会　場：滋賀県立大学交流センター ホワイエ



近江楽座が始動してから 10 年という、ひとつの節目に「今までの活動から生まれた様々な想いを紡いでいきたい」という趣旨のもと、近江楽座学生委員会が主催となり開催しました。

展示内容：

○ 毎年発行の活動紹介リーフレットと報告書冊子、チームの作成した刊行物の閲覧コーナー
○ 皇太子殿下の近江楽座のご訪問の際の行啓史、プロジェクトチームへの感謝状、平成 24 年「子ども若者育成・子育て支援功労者表彰」内閣府特命大臣賞受賞の賞状と盾
○ 10 年間の活動紹介パネルと楽座新聞
○ 連続旗コーナー（来場者からのメッセージ）

展示会場入り口「紡」の文字

「紡」の文字から始まる毛糸は途切れず展示物を繋ぎ、最後には連続旗コーナーへと続く

行啓史や感謝状、賞状、盾の展示

展示会パンフレット

パンフレット中身、DM、DVD パッケージ

各チームの地域関係者の方々や OB,OG のほか、
初代事務局スタッフの方々も来場下さりました

「楽座紡ぎのワークショップ」

日　時：2 月 22（土）　13:00 ～20:00
会　場：滋賀県立大学交流センター　研修室 1,2,3
参加総数：52 名（学生・教員・OBOG 合計）

近江楽座 10 周年を記念して近江楽座学生委員会主催のワークショップイベントを開催し、OB・OG、現役メンバー 含む総勢 52 名が集結しました。今回の記念イベントでは、10 年経ってもずっと変わらない学生の思いや共通の悩み、地域での活動経験から得られた学び等について、先輩・後輩が一同に共有できた大変貴重な機会になりました。

プログラム：
○ 楽座 OBOG トークショー
○ アイスブレーキング（他己紹介）
○ 楽座紡ぎのワークショップ①（意見交換）
○ 楽座紡ぎのワークショップ②（ボード作り WS）
○ 学生制作 近江楽座 10 周年記念ムービーの上映
○ 交流会（看護食堂ナシェリアにて）

○ 楽座 OB・OG トークショー

本間浩平さん（ART FORUM 2010 DIG`S 代表）、大橋結実さん（Taga-Town-Project）、 山形蓮さん（くつきチーム・ほたてあかりプロジェクト）をゲストにお招きして学生による司会進行のもと、インタビュー形式で活動当時のことについてお話しいただきました。

○ アイスブレーキング（他己紹介）

ワークショップに入る前にまずウォーミングアップ として、アイスブレーキングを兼ね“他己紹介”が行われました。全体を９つのチームに分け、各チームの中でペアをつくり、５分間で所属しているチームや学部学科、好きなものなどについて、互いの自己紹介を行いました。

全てのペアの自己紹介が終わると、いよいよ『他己紹介』のスタート。制限時間８分で同じチームの人たちに、ペアになった人を紹介していきます。自分ではない人を紹介することで、お互いのことについて、よく知り合うことができました。このアイスブレーキングのあとは、少し緊張感が漂っていた会場の雰囲気が、ほぐれていきました。

○ 楽座紡ぎのワークショップ①（意見交換）

近江楽座で活動する中で得た、「気づき」や「学び」に関する6つのテーマが用意され、ひとりずつサイコロを振っていきます。出目と同じ番号のテーマについて、自分の意見を共有していくという内容のものです。卒業生は近江楽座で活動していた頃を思い出しながら、そして、現在活動中のメンバーは日々の活動を振り返りながら、各テーマについて語り合いました。一人の意見から、どんどんと話題が広がっていき、時間いっぱいまで語りあうチームもありました。会場からは「へぇ～！」という新たな気付きの声や、「わかる、わかる！」といった共感する声も上がっていました。

《６つのテーマ》

1. 地域の人との関わりの中で苦労した事は？
2. 楽座に参加したきっかけ
3. モチベーション維持の方法
4. 後輩に伝えなければならない事
5. 楽座を通して成長できる事
6. （先輩がいれば） 教えてほしかった事

○ 楽座紡ぎのワークショップ② （ボード作り WS）

近江楽座をさらに盛り上げていくための楽座の“未来” について考える“ ボードづくりWS” を行いました。

・パーソナルボードの作成

全員に色画用紙が配布され、色ごとに決められているトピックについて個人の意見を記入し、指定のボードに貼り付けていきました。（トピック例）「近江楽座の魅力は？」、「近江楽座を漢字一文字で表すと？」など。

・グループボードの作成

次に再度チームに戻り、はじめに完成したパーソナルボードを参考にしながら、各チーム1トピックについて、ひとつ考えを導き出していきました。そして、チームで出たアイディアを指定のグループボードに記入していきました。完成後は、全体での発表会を行いました。それぞれの持ち時間は短く限られていましたが、どのチームの発表者も、時間内に収まるように工夫しながら要領よく内容をまとめ、堂々と発表している姿が印象的でした。

○ 学生制作 近江楽座10周年記念ムービーの上映

オープニングとエンディングでは学生が制作したムービーが上映されました。各チームが活動する地域の方々からのサプライズメッセージも流れました。地域の方々の学生に対する気持ちがよく伝わる内容でした。

○ 交流会

イベント終了後には看護食堂ナシェリアにて軽食付きの交流会が開催され、楽座や県大に関わるクイズやゲームで大変盛り上がり、名刺交換をしてネットワークを広げている学生もいました。

企画の草案から約９ヶ月。学生委員会を始め、有志メンバーを合わせた学生 17 名が中心となり、会議を重ね、企画・広報ともに力を入れて、ぎりぎりまで準備に取り組んできました。その成果が存分に発揮されたイベントとなりました。

開催までのドキュメント

第 1 回近江楽座学生委員会ミーティング

5 月 17 日（金）交流センター ホワイエ

「座・マルシェ」の企画（案）があがる。
“ 過去 10 年間で近江楽座が紡いできたつながり ” OBOG をともに交え活動の経験を振り返る。「地域と関わりながらの活動で『学生』と『地域』の双方にはどのような効果があったのか、10 年という1つの節目を迎えるにあたって考える場が必要なのではないか…」イベントの予定を 10 月 6 日（パネル展示は 10 月 7-10 日）に決める。

第一弾「企画書」を事務局に提出

9 月 27 日（金）

10 周年企画代表の石田元さん企画書を提出。

合同企画会議

10 月 6 日（日）

準備不足のためイベント開催を見送る。近江楽座学生委員会のメンバーと、前任と後任の近江楽座事務局員が集まり企画会議を開催。改めてイベントのイメージについて共有を図る。イベントを通して実現したいこと、どんな内容にしたいのか意見を出しあう。

コアメンバー会議

10 月 16 日（水）交流センター 研修室 4

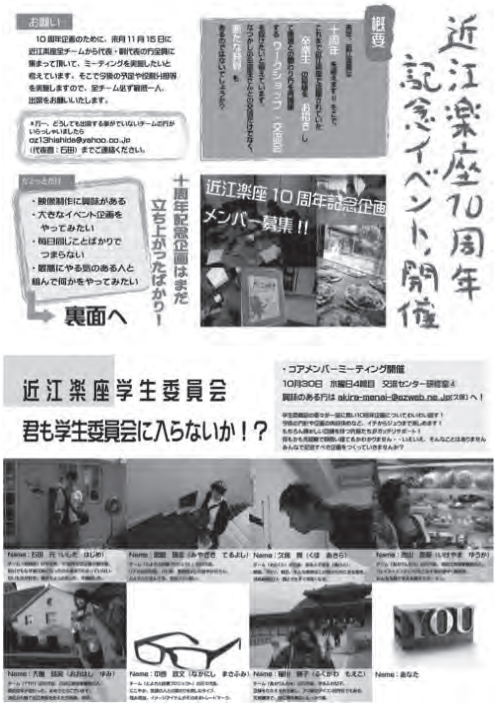
大まかにプログラムの内容を確認。役割分担をする(ムービー班、WS班、交流会班、広報班)。「本番に向けて、2013年度近江楽座の全20 チームに関わってもらいたい！」。

チームへの呼びかけ方法について考える。→全チーム参加の大ミーティングの開催を決定する。⇒参加を呼びかけるためのチラシを作成（同時に学生委員募集も呼びかけ）。

中間報告会

10 月 23 日（水）～25 日（金）

中間報告会終了後に「学生委員会からのお知らせ」の時間を設け、チラシの配布と 10 周年企画についての説明を行い、大ミーティング参加への呼びかけを行った。



配布したメンバー募集のチラシ

大ミーティング開催 + 親睦会

11 月 15 日（金）交流センター 研修室 1,2

大ミーティングには 20 チーム中 17 チームが参加し各団体の代表副代表が顔を合わせた。

改めて企画の趣旨を伝え協力を依頼する。不参加だったチームには、代表からメールで連絡をとり対応。同時にイベントへの意識調査・アンケートを実施し、企画へのアイディアも募集する。

大ミーティング終了後に、チーム同士の親睦を深めようと親睦会を開催。スターターメンバーと

参加学生との距離がとても近くなった。個々のチーム間で持たれていた楽座の横のつながりが、さらにつながっていった。そして、この交流会をきっかけにコアメンバーが増える。

大ミーティングの様子

新メンバーを迎えてコアメンバー会議

11 月 26 日（火）

細かな役割分担が決定し、新メンバーの班分けが完了。この全体会議から各班ごとに活動開始。学生委員会スターターメンバーが各班の班長を担当。まめに連絡をとりあい、ミーティングを重ねる。

第 2 回大ミーティング開催

12 月 13 日（金）交流センター研修室1,2

各班から進行状況を説明。全チームに対して当日の自チームの参加人数を把握するため出席確認名簿を配布。イベント開催日を 2 月 22 日（土）、特別展示会を 2 月 18 日(火）～ 24 日(月）に決定。

| テーマとそれぞれの実行班の役割

テーマ「過去の振り返りと未来の確認」

○ワークショップ班

10 年間の交流をどのようにワークショップを通じて行うか。試行錯誤を重ねる。

ワークショプの内容は、「過去の振り返りと未来の確認」というテーマを基に、今後近江楽座を実施する後輩たちに向けた成果物を作成。掲示板というツールを用いて、過去の振り返りと未来の確認に関する 10 項目のテーマ（後輩に伝えなければいけないこと、この先の楽座事業の担い手は学生か地域か…等）を用意し、それにについてまず個人で考えてもらい、意見を掲示板に掲示していく。その後に、他の参加者の方々とグループになり、テーマについてまとめを実施する。

○ムービー班

イベントの開会にあたり、参加者に向けたムービーを上映。「構成」「取材」「撮影」「編集」を全て学生が行ったムービーである。

○広報班

イベント広報関係＋特別展「楽座紡ぎの展示会」の企画を担当。イベントポスターと DM を作成し、各学部等に掲示また配布した（事務局カウンター設置、楽座メールBOX への投函etc.）。過去10 年の近江楽座OB・OG へは、10 周年記念イベントの参加を呼びかける案内チラシとDM を送付。また、WS イベント（2 月22 日開催）のfacebook ページを立ちあげ、SNS 上でもOB・OG に参加を呼びかけた。

学内の掲示板には、イベントポスターに加え開催当日までの期間を盛り上げるために「楽座紡ぎの展示会新聞」と題し、企画に関わるメンバーの紹介や近況報告についてまとめた広報物を作成し掲示した。

○交流会班

OB・OG と現役メンバーとの交流をさらに深めるため、看護食堂ナシェリアにて食事会を開催。レクレーションも企画され盛り沢山の内容となった。

5 他大学、団体との交流

5-1 韓国大学生訪日研修団視察

日　時：11月11日（金）
場　所：A7棟中講義室、ナシェリア（看護食堂）

世界的視野に立った新しい日韓の友好親善協力関係を構築するための交流事業（JENESYS2.0）の一貫として韓国大学生訪日研修団（学生・教員計33名）の皆さんが本学に来訪されました。

韓国大学生訪日研修団のみなさんは、滋賀県内の施設や寺院の他、各地域での取り組みを2日間に渡り見学し、本学では「近江楽座」の学生と交流する機会をいただきました。「滋賀県大BASSER'S」、「政所茶レン茶゛ー」、「かみおかべ古民家活用計画ーSLEEPING BEAUTY ー」、「木興プロジェクト」の4チームの学生が各地域での取り組みについて発表しました。

近江楽座チームの発表の様子

韓国の学生の皆さんは、様々な反応を示しながら、興味深そうに発表を聞いておられた姿が印象的でした。続いて、韓国の学生の皆さんからは韓国の歴史や文化についての発表紹介があり、近江楽座の学生たちは、ハングル文字の成り立ちや礼儀作法、軍隊での生活といった異文化について学びました。

最後にナシェリアにて、軽食を取りながらさらに交流を深めました。韓国の学生さんから歌やテコンドー演舞などの披露もあり楽しい交流会となりました。

韓国の歴史や文化についての発表紹介

韓国の学生によるテコンドー演舞

本学学生と研修団の皆さん

5-2 高知県立大学「立志社中」中間報告会

日　時：12 月 7 日（土）13：30 ～ 17：00
場　所：高知県立大学

高知県立大学より、同大学の学生地域貢献活動プロジェクト“立志社中”の中間報告会で、滋賀県立大学“近江楽座”の学生に先進事例として報告してほしいとの依頼を受け、12 月7 日に近江楽座から、「おとくらプロジェクト」久保晃さん（2012・2013 年度 代表）、「あかりんちゅ」　福川萌子さん（2012 年度 代表）、「能魅会」石田元さん（2012 年度 コアメンバー）、「男鬼楽座」本保輝紀さん（2013 年度代表）の4 名が高知を訪問しました。

立志社中とは、地域文化の振興・再生や地域の課題解決に主体的に取り組む学生団体を公募し、審査を行い、採択された学生団体に対して活動経費の助成等を行う活動支援事業です。今年度より高知県立大学の新たな取り組みとして実施されています。（高知県立大学地域教育センター HP より抜粋）

近江楽座の学生の発表時間は1 時間で、「近江楽座」の概要を5 分、1チームにつき約15 分の持ち時間で、活動概要や実施体制、活動を通じての課題と成果を発表し、その後質疑応答を行いました。

このように外部から、自分たちの活動について発表し、交流する機会を与えていただけたことは、本当にありがたいことです。参加した学生たちは大いに刺激を受け、多くの学びを持ち帰り、一層、力を発揮してくれることにつながります。

学生の感想を抜粋します。

「…近年活動継続の難しさを肌で感じている本学の学生達も、他の地域で活動する学生の姿を見て、啓発されるものがあるのではないだろうか。…」
「…今回の交流で学んだことを後輩たちに伝え、今後の近江楽座の発展に貢献できればと思います。」
高知県立大学の皆様に本当に感謝いたします。

近江楽座の学生と立志社中の皆さん

立志社中チームによる中間報告の様子

近江楽座についての概要説明をする本学学生

5-3 環びわ湖大学地域交流フェスタ 2013

日　時：12 月 14 日（土）13:00~17:30
会　場：龍谷大学瀬田キャンパス（大津市）

＜プログラム＞

1．開会挨拶
2．基調講演（講師：池田幸應・金沢星稜大学教授 地域連携センター長／大学コンソーシアム石川地域連携専門部会長）
3．ポスター発表
4．実践交流会（交流セッション）
　1「ー地域の課題解決と人材育成ー」
　2「ー地域が豊かになる仕事と暮らしー」
　3「ー大学地域連携、その課題と方向ー」
　4「ー学生支援事業参加学生による報告ー」
5．全体交流会
6．閉会

参加チーム：
○ 木興プロジェクト
○ 田の浦ファンクラブ学生サポートチーム

県内13 大学と行政、経済団体・企業等が加盟する環びわ湖大学・地域コンソーシアムが、地域に根ざす人づくり」をテーマに“ 環びわ湖大学地域交流フェスタ” を開催しました。県内の大学関係者、学生、地域および自治体関係者など約170 名が参加しました。

午後1 時から、主催者を代表して当コンソーシアム代表幹事で大学地域連携事業委員会の仁連孝昭委員長（滋賀県立大学副学長・理事）が開会挨拶を行いました。続いて、金沢星稜大学教授で大学コンソーシアム石川の地域連携専門部会長を務める池田幸應氏から、「地域と連携した取り組みの成果と課題～大学コンソーシアム石川の事例～」をテーマに、地域と大学が連携した具体的事例を紹介しながら、地域と連携した取り組みの成果と課題、大学コンソーシアムへの期待などについて基調講演が行なわれました。

その後、ポスター発表と4つの会場に分かれて実践交流会が行なわれ、最後に全体交流会を行いました。ポスター発表のプログラムでは、近江楽座プロジェクトチームである「木興プロジェクト」と「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」が出場し、両チーム共に、東北と滋賀を行き来し展開している自チームの活動について発表しました。

ポスター発表の様子

このポスター発表では、選定委員による審査が行われ、20団体のうち7団体が奨励賞を受賞され、近江楽座からは「木興プロジェクト」が受賞し、全体交流会の場で表彰されました。

活動奨励賞を受賞

交流会の様子

6 情報発信

6-1 ホームページ、リーフレット、プロジェクトレポート

近江楽座ホームページの運営

滋賀県立大学における、学生の地域活動に関するポータルサイトである近江楽座ホームページの運営を行っています。学生たちの活動の様子をより多くの方にみてもらえるサイトするため、引き続きリニューアルを行いました。

近江楽座ホームページ
http://ohmirakuza.net

＜リニューアル内容＞

○ 活動写真スライドショーのサイズを拡大
○ トップページに近江楽座 facebook ページへのバナーリンクを設置
○ SNS を活用するチームが増えてきたことから、プロジェクトページの一覧に facebook,twitter へ移動できるリンクボタンを設置

活動紹介リーフレット 2013

近江楽座プロジェクトで活動する学生に依頼し、近江楽座全体の取り組みや本年度近江楽座に採択された20プロジェクトを写真入りで紹介するリーフレットを作成しました。

近江楽座活動紹介リーフレット 2013

プロジェクトレポート

事務局スタッフが、実際にプロジェクトの現場を訪れ、活動レポートを作成・発行しました。本年度は計5号発行。発行したレポートは学内食堂前にある近江楽座掲示板と、近江楽座ホームページ上で掲載しました。

〈2013 年度プロジェクトレポート〉

○［政所茶レン茶゛―］お茶つみ体験

○［能魅会（のみかい）］メガネカフェ

○［おとくらプロジェクト］
　中山道高宮宿サマーフェスティバル出店

○［Taga-Town-Project］
　多賀と学生の成長の記録展

○［とよさと快蔵プロジェクト］満ち家・ミツマルシェ

プロジェクトレポート一覧のページ
http://rakuza2010.blogspot.jp/p/blog-page_3345.html

レポート第1号

レポート第3号

6-2 京都新聞 夕刊特集「@キャンパス」

「@キャンパス」は、京都新聞夕刊の特集で、滋賀・京都の大学生が、まち、社会、文化、大学、学生、教育などをテーマに、自分たちで取材・記事作成を行うページです。 毎週水曜の2・3面に、大きく見開きカラーで掲載されました。近江楽座からは、2011年度に14 チームが記事を担当しています。

今年度は、東日本大震災の復興関連の活動を行っているプロジェクト、また、そのサポートを行ったプロジェクトの計5チームで記事を構成しました。今回の大きなテーマは「再生」です。3回に渡って記事が掲載されました。これらの記事は、各回ごとに顔合わせから発行まで約1 ～2 ヶ月ほどかけて作成しています。

学生メンバーと京都新聞社さんでの会議風景

| 第1号 『被災地と光でつながる』

発行日：2013 年 9 月 25 日（水）

担当チーム ：「あかりんちゅ」、「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」

「田の浦ファンクラブ学生サポートチーム」は「ほたてあかりプロジェクト」を母体としており、ほたてあかりの活動が始動する際に、リサイクルキャンドルの技術提供を「あかりんちゅ」が行っています。

被災地と光でつながる

@キャンパス

滋賀県立大「近江楽座」

第2号 『被災地に集会所を建てる』

発行日：2013 年 11 月 20 日（水）

担当チーム：「木興プロジェクト」

会所建設へのきっかけや学生たちが現場で得た経験などがまとめられている他、建物が完成するまでの様子を定点カメラで記録した写真が記事とともに掲載されました。

被災地に集会所を建てる

@キャンパス

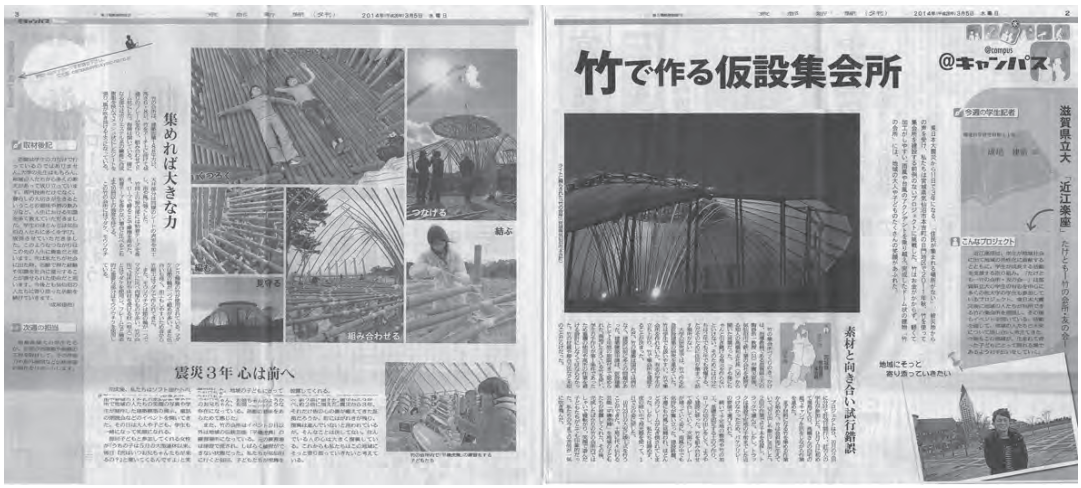
滋賀県立大「近江楽座」

第3号 『竹で作る仮設集会所』

発行日：2013 年3月5日（水）

担当チーム：「たけともー竹の会 友の会ー」

「竹の会所」の建設から、整備や補修、イベント企画などの活動の様子が書かれています。竹を資材にした、美しい会所の写真も大きく掲載されました。



竹で作る仮設集会所

@キャンパス

滋賀県立大「近江楽座」

6-3 『びわ湖 No.79』
一般社団法人滋賀県建築士事務所協会 創立30周年記念特集号

一般社団法人滋賀県建築士事務所協会の創立30周年記念特集号「びわ湖 No.79」(2013 年7 月発行)、「滋賀県における伝統的な街並みの継承やまちづくりへの取組み」を紹介する特集に、信楽人、とよさと快蔵プロジェクト、TTP、おくとらプロジェクトの4 チームが寄稿しました。

7 付録

7-1 プログラム推進メンバー※

事業推進代表者	滋賀県立大学理事長　大田啓一
事業推進責任者	近江楽座専門委員会　委員長　印南比呂志

近江楽座専門委員会

環境科学部	浦部美佐子
	林宰司
	松岡拓公雄
	村上修一
	迫田正美
	杉浦省三
工学部	河﨑澄
	栁澤淳一
人間文化学部	濱崎一志
	石川慎治
	印南比呂志
	佐々木一泰
	細馬宏通
人間看護学部	伊丹君和
	横井和美
全学共通教育推進機構	鵜飼修

近江楽座事務局	秦憲志
	池山邑華
	竹村香織

※ 2013 年度 (平成 26 年 3 月末時点)

このほか、近江楽座に関わり支援いただいたすべての方にお礼申し上げます。

7-2 メディア掲載一覧

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
1	2013.8.31	滋賀県大 BASSER'S	ノーバスネットニュースマガジン	にぎやかな水辺 お魚捕り「夏の陣」は楽しくてあっという間
2	2013.10.7	滋賀県大 BASSER'S	NHK 大津　おうみ 610	外来魚駆除 県立大の学生サークルが取り組む
3	2013.12.15	滋賀県大 BASSER'S	ノーバスネットニュースマガジン	にぎやかな水辺　　巨大カムルチーも捕獲 神上沼定例駆除活動「秋の当歳魚編」
4	2013.6.30	男鬼楽座	茅ふきたより（一般社団法人日本茅葺き文化協会）	彦根市男鬼町 「茅葺き屋根　葺き替えイベント」
5	2013.9.30	男鬼楽座	中日新聞	かやぶき屋根を修復
6	2013.9.30	男鬼楽座	京都新聞	古民家のかやぶき体験
7	2013.4.8	信楽人	中日新聞	信楽愛 " 準備に一役
8	2013.5	信楽人	あいコムこうか	Eye こうか NOW「ええとこみーつけた！」
9	2013.7	信楽人	滋賀県建築士事務所協会「びわ湖No. 79」	信楽+ 滋賀県立大学
10	2013.8.20	信楽人	信楽まちなか芸術祭実行委員会	THE TANUKI 出展者一覧（第２回信楽まちなか芸術祭公式ガイドブック掲載）
11	2014.2.26	信楽人	窯元散策路の WA	ぶらり窯元めぐり、案内チラシに掲載
12	2014.3.6	信楽人	NHK 大津　おうみ６１０	週刊ガッコウ通信
13	2013.11.20	かみおかべ	一般財団法人ハウジングアンドコミュニティ財団	第 20 回「住まいとコミュニティづくり活動助成」報告書
14	2014.2.18	かみおかべ	月刊 地方自治･職員研修 2014 年３月号	かみおかべ古民家活用計画で見えてきたもの
15	2013.8.1	とよさらだ	こだわり滋賀ネットワーク	環境こだわり農業を実践しています～とよさらだプロジェクトの取り組み～
16	2013.6.19	田の浦ファンクラブ	しが彦根	被災地の漁師ら招き　県大で防災シンポ
17	2013.6.21	田の浦ファンクラブ	京都新聞	南三陸の漁師 , 現状報告 あす県立大でシンポ
18	2013.6.23	田の浦ファンクラブ	朝日新聞	南三陸の漁師ら体験語る 県立大で防災シンポ
19	2013.6.23	田の浦ファンクラブ	中日新聞	3・11 の記憶を刻む　震災の傷痕語る
20	2013.6.25	田の浦ファンクラブ	京都新聞	「災害時、自分の身大事」南三陸の消防団員、草津・玉川小訪問
21	2013.7.13	田の浦ファンクラブ	京都新聞	南三陸の復興支援 学生活動に募金を 滋賀県立大生
22	2013.7.23	田の浦ファンクラブ	中日新聞	被災地で交流深めて 県立大生らボランティア募集
23	2013.9.25	田の浦ファンクラブ	京都新聞@キャンパス	滋賀県立大「近江楽座」被災地と光でつながる
24	2014.3.9	田の浦ファンクラブ	京都新聞	東日本大震災３年支え続けたい 先輩が築いた信頼継ぐ
25	2014.3.11	田の浦ファンクラブ	読売新聞･しが県民情報	被災３年深まる縁　南三陸町を定期訪問
26	2014.3.11	田の浦ファンクラブ	産経新聞	きょう宮城の被災地でキャンドル 600 個 滋賀
27	2014.3.12	田の浦ファンクラブ	中日新聞	鎮魂のキャンドル 県立大生、南三陸・田の浦を訪問
28	2014.3.16	田の浦ファンクラブ	朝日新聞	宮城・南三陸町田の浦に交流の場 学生、住民の絆結ぶ
29	2013.3.14	スチューデント・キュレイターズ	京都新聞	「ヨシ博士」西川さんの遺品４０点、琵琶博で展示
30	2013.7.11	木興プロジェクト	京都新聞	カブトムシ小屋玉川小に

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
31	2013.7.13	木興プロジェクト	京都新聞	南三陸の復興支援学生活動に募金を
32	2013.10.9	木興プロジェクト	読売新聞	被災地に集会所増築
33	2013.10.10	木興プロジェクト	朝日新聞	南三陸に集会所施設増築
34	2013.10.11	木興プロジェクト	産経新聞	南三陸に集会所施設増築
35	2013.10.11	木興プロジェクト	産経新聞	南三陸町支援　実を結ぶ
36	2013.10.17	木興プロジェクト	近江同盟新聞	被災地集会所もっと快適に
37	2013.10.19	木興プロジェクト	しが彦根新聞	被災者のより所になって」田の浦に集会所増築南 RC が支援
38	2013.11.20	木興プロジェクト	京都新聞 @ キャンパス	被災地に集会所を建てる
39	2013.7	TTP	滋賀県建築士事務所協会「びわ湖 No. 7 9」	多賀＋滋賀県立大学
40	2013.7.13	Harmony	中日新聞	カヌーでスイスイ
41	2013.8.27	Harmony	中日新聞	障害者の自立願い活動
42	2013.12.1	Harmony	中日新聞	温かXマスムード満喫
43	2013.10.1	三階蔵部	広報おうみはちまん	イベント広報「三階蔵展」
44	2013.10.28	三階蔵部	ZTV	近江八幡支局おうみ！かわら版「近江八幡」「三階蔵展」
45	2013.10.28	三階蔵部	ZTV	近江八幡支局おうみ！かわら版「近江八幡」「旧西川利右衛門家住宅三階蔵 特別公開」
46	2013.11.1	たけとも-竹の会所 友の会-	新建築 2013 11 月号	特集：みんなでつくる小さな建築
47	2014.3.5	たけとも-竹の会所 友の会-	京都新聞 @ キャンパス	竹で作る仮設集会所
48	2013.4.24	おとくらプロジェクト	滋賀彦根新聞	眞野丘秋さん絵画展
49	2013.7	おとくらプロジェクト	滋賀県建築士事務所協会「びわ湖 No. 7 9」	彦根市 高宮＋滋賀県立大学
50	2013.9.13	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	岡田健太郎のピアノライブ
51	2103.11.2	おとくらプロジェクト	中日新聞	蒲生さん作品展
52	2013.11.29	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	おとくら読み聞かせ大会一日
53	2013.12.8	おとくらプロジェクト	中日新聞	水彩や日本画２人展
54	2013.12.13	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	掛軸・水彩・ペン画約 30 点
55	2013.12.20	おとくらプロジェクト	滋賀ガイド遊覧選	メリークリスマス　in おとくら
56	2013.12.20	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	X マス・バロックコンサート 21 日
57	2014.1.11	おとくらプロジェクト	近江同盟新聞	おとくら新春掘り出し物市
58	2014.1.31	おとくらプロジェクト	し が ス タ！ KBS 京都ラジオ	『キラリ☆滋賀ネット！』
59	2014.1.24	未来看護塾	し が ス タ！ KBS 京都ラジオ	いきいきライフ 未来看護塾の活動や主な取り組み
60	2014.3.11	未来看護塾	読売新聞 しが県民情報	未来看護塾の田の浦での活動について
61	2013.6.2	政所茶レン茶゛ー	京都新聞	東近江で栽培　県立大生ら初の茶摘み
62	2013.6.8	政所茶レン茶゛ー	中日新聞	政所活性化茶畑から　県大生ら農作業に汗
63	2013.6.9	政所茶レン茶゛ー	毎日新聞	政所茶レン茶゛ー参上！　若い力で茶所救う
64	2013.6.14	政所茶レン茶゛ー	読売新聞	表紙 / 改修内容紹介
65	2013.6.30	政所茶レン茶゛ー	京都新聞 凡語	政所茶

No	日　時	チーム	メディア・団体	見出し・視察内容
66	2013.7.23	政所茶レン茶゛ー	京都新聞	県立大生　育てた新茶振る舞う　東近江市長「おいしい」
67	2013.10.9	政所茶レン茶゛ー	エフエム滋賀　style！	「平和堂マイデイリーライフ」の中で政所と茶レン茶 " ーの活動を紹介する。
68	2013.12.2	政所茶レン茶゛ー	日経グローカル	大学の地域貢献度ランキング
69	2013.9.25	あかりんちゅ	京都新聞 @ キャンパス	滋賀県立大「近江楽座」被災地と光でつながる
70	2013.10.5	能魅会（のみかい）	リビング滋賀	キラリ！と輝く大学生
71	2013.7	とよさと快蔵プロジェクト	滋賀県建築士事務所協会「びわ湖 No. 7 9」	豊郷＋滋賀県立大学
72	2013.8.6	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	学校の怪談
73	2013.10.25	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	古民家イベント開催「ミツマルシェ」
74	2013.11.22	とよさと快蔵プロジェクト	中日新聞	古民家のお宝を販売（レトロ市）
75	2013.11.23	とよさと快蔵プロジェクト	読売新聞	古民家レトロ市
76	2013.11.23	とよさと快蔵プロジェクト	しが県民情報	古民家レトロ市
77	2014.3.6	近江楽座 , 学生委員会	NHK 大津　おうみ６１０	週刊ガッコウ通信「近江楽座 10 周年記念企画」

公立大学法人　滋賀県立大学

スチューデントファーム「近江楽座」

まち・むら・くらしふれあい工舎

2013 年度活動報告書

平成 27 年 1 月発行

発行	公立大学法人　滋賀県立大学
	地域共生センター
	〒 522-8533　滋賀県彦根市八坂町 2500
	TEL. 0749-28-8616　FAX. 0749-28-8473
企画・編集	近江楽座事務局
印刷・製本	近江印刷株式会社
構成・デザイン	角真央

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製、転載することは禁止されています

最新情報は、近江楽座ホームページ：http://ohmirakuza.net をぜひご覧ください

近江楽座
まち・むら・くらしふれあい工舎